
執行者

竜太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執行者

【Nコード】

N9150G

【作者名】

竜太郎

【あらすじ】

坂崎健一は癌の宣告を受けた。そして瞬く間に死をむかえる。死んだはずの坂崎は執行者としての使命を与えられる。執行者とはあらかじめ予定さらた「死」を円滑に執行するために送り込まれる死人。坂崎が執行する死とは？是非評価の程お願い致します。

第1話

坂崎健一は沈痛な面持ちの医師にこういわれた。

「坂崎さんの余命はもって半年です。」

伏目がちなながらも、一言一言を正確に言葉にする医師とは裏腹に、悪夢が現実になった妻はみなまで待たずにハンカチで顔を覆いこらえきれずに声を漏らした。

熱っぽさが抜けずに咳もでる。かかりつけの家庭医に相談したのが3ヶ月前だった。先代から引き継いだ加藤医院は建物こそ古いが院長の気さくな人柄に支えられ地域住民の安心を支えるよりどころとして十分に機能していた。熊のような大柄な院長はいつものように聴診器を当てのどの奥を懐中電灯で照らした。

「流行の風邪だね。薬を出しておくよ。」診察内容をカルテに書き込む間のわずかばかりの世間話。の、はずだった。が、その日はどうしたわけか世間話の代わりに「レントゲンを一枚撮っとくか」という意外な言葉が返ってきた。

そこから坂崎健一の運命は激変した。精密検査のための入院。そして治療のための入院。胃潰瘍。そんな優しいそはなかった。

「精密検査の結果は肺がんです」

告知は早かった。カンファレンスルームに呼ばれるわけでもなく、何の前触れもなく現れた若い担当医はまるで今日の天気はと言う感じで健康体と信じていた体をがん患者のそれに変えてしまった。お互いに病気という不安を持っている入院患者は連帯意識が強い。坂崎の隣には急性胃潰瘍で緊急搬送された50台の<早さん>が「私は生まれて始めて救急車に乗りましてね、血をシャツが真っ赤になるくらいに吐血したんですよ」そういつて笑っていたが、一切の食事ができなかった。向かい側の初老の<典さん>は喘息の発作をおこし夜中の間中咳をしていた。咳を我慢しながら典さんが今までの入院歴を披露し、早さんが何度も聞いた吐血の話の話を繰り返していた。

妻はもらい物のりんごの皮をむき一人に配り、お返しにやはりお見舞いの饅頭を頂いたりしていた。

「坂さんはまだまだ若い心配することはない」

早さんがそう言うのと全くだという感じで典さんもうなずいた。自分は血も吐いてなければ始終咳をすることもない。優劣をつければ自分の体が一番の健康体だろう。加藤医院での診断は医師の要らぬ心配に他ならない。そう思うとどこからともなく根拠のない自信が沸き起こり、体のことよりもほかってきた仕事に心配になってくる。西日が差していた。

ふらりと現れた若い医師は「ども」という挨拶で坂崎の前に立った。

「精密検査の結果が出ました。」

「あ、えっ、そうですか」

検査結果は翌日に担当医より報告されることになっていた。突然のことに間の抜けた返事になってしまった。

早さんと典さんは事の成り行きを察するように目配せをして自分のベットへと戻ろうとした。

「ざんねんですが、肺がんです。」

すっと出てきた言葉に坂崎の理解は追いつかなかった。

肺がん？ ざんねんですが？ 何が残念で何が肺がんなのか？

妻が手にしていた包丁が滑り落ちベットの柵にあたり金属音が響いた。ぽつかりと口をあけて固まってしまった早さんの背中を典さんが叩きそそくさと部屋を出て行った。そして医師と妻と坂崎が残された。

坂崎は必死に考えようとした。しかし何を考えていいのかが全く持って分からなかった。

癌は知っている。そうだ癌は病気だ。年をとると多くの人が癌になる。俺はまだ若い。癌とは関係ない。では、何が残念で、何が癌なのだ？

「おとうさん」

妻が入院患者用のガウンの袖を引っ張った。声が震えている。

「だ、だ、だ、・・・」

大丈夫だ。おかしな風ばかりがのどを震わすだけで声にならなかった。

「大丈夫ですか？」

坂崎の代わりにそう言ったのは若い医師だった。坂崎はうなずいて見せたが全身の毛穴から何かが抜け出していくような熱さを感じた。そして腹の中にゴロリとした不快な塊が広がった。

「わたし、が、ですか？」

坂崎は細く長い息を吐いた後に聞いた。

「はい。残念ですが」

医師の言葉がじりじりと頭の中に響くと、残念という言葉がまるでアメーバのように分裂し増殖し体中を駆けずり回り烈火のごとく怒りに変わった。

「何が残念だ！ どういうつもりだバカヤロー！！」

怒りに任せてベットサイドを殴りつけた。ナースコールのようなインターホンがはずれ床に転がった。

「俺ががんだと！そんなわけがないだろう！」

怒鳴りつけると医師の顔から、仮面がはがれるように青白い拗ねた顔が現れた。

「どうしましたかー？」

すでに事情を察知した看護婦は、複数で医師を引きずるように部屋から連れ出した。若い医師は、告知のための手順を明らかに謝った。その後、平身低頭で婦長やら内科部長やらの肩書きを持った人間が現れた。

誰の言葉も聴きたくはなかった。すべての言葉が上の空で現実感を持たなかった。

しかし・・・。

おそらく本当なのだろう。事実だろう。俺は残念なのだ。

坂崎は医師も看護婦も追い返した。そして、妻も追い返した。妻

は泣いていた。

「おれは・・・なのか？」

布団に包まって何度となく同じ質問を繰り返した。頭の中ですらその言葉を発した瞬間に本当に、本当にすべてが現実になってしまっ
そうで怖かった。

俺は癌なのか？

坂崎の父親はすい臓がんで死亡した。義父もやはり癌だった。癌になればどうい
う経過をたどり、そしてどうなるのかは身をもって体験したようなものだった。

布団の中で恐怖と戦った。

恐怖は長続きしなかった。

抑えきれない怒りと戦った。

怒りは長続きしなかった。

底なしの不安と戦った。

不安は長続きしなかった。

すべての戦いに坂崎は敗れた。病室の並ぶ廊下を何とかおさえきり便所に駆け込んで吼えた。すぐに看護婦がやってきてベットに戻された。

「大丈夫かい？」

そう言ったのは典だった。

「うるせー。その喘息ののどをひきちぎるぞ！」

誰の言葉も聞き取ることができなかった。世界中でたった一人残念賞のカードを引き当て孤独のふちに立たされた気分だった。あると信じていた、在るのが当たり前だった、今と未来が瞬く間に崩れ落ちその下から癌と言う怪物がのっそりと口をあけた。病室を抜け出しタバコをすった。缶コーヒ―は、味がしなかった。酒がほしかった。うんと強い奴をロックで。

結局一睡もすることができなかった。日の出を待ち妻に電話をかけ

た。ワンコールで妻は電話をとった。

その日の内に坂崎は大学付属病院にむかった。

「俺が癌のわけがない」

その数日後には国立がんセンターにむかった。

国立がんセンターの肺癌専門医はCTスキャンの写真を見つめながら間違いないとうけおった。

「坂崎さんの余命は持って半年でしょう。」

妻の泣き声が耳障りだった。

第2話

坂崎には二人の子供がいた。3歳と8歳。国立癌センターの前には、区立の（ワンワン王国）という保健所の出先機関がある。子供たちは父親の見舞いもそこに「ワンワンのところにいこう」と騒ぎ出す。ワンワン王国では、新たな飼い主を見つけなるべく、一時預かりとなった犬とのふれあいの場を設けていた。坂崎も子供につれられ小さな広場に放し飼いになった子犬を眺めた。

「お父さんこの子かわいい」

8歳になる奈美は白と黒の交じり合ったラブラドル風の子犬を抱き上げた。かわいいといって頭をなせる娘。

「お父さん。かわいいでしょう」

3歳になる長男の太郎は、奈美のまねをしてやっこのことで捕まえたい子犬を抱きかかえた。抱きかかえられた子犬はあわてて暴れだし太郎の腕をすり抜け隅のほうへと逃げていく。

「ワンちゃん待って、いたくないからね、まっててば。」

太郎よりも犬のほうが早かった。

「お父さん、この子飼ってもいい？」

七海は、子犬を抱きかかえて上目使いで見上げた。

「自分のことがしつかりと出来るようになってからでしょ。動物を飼うのは。」

妻の湯子がそういった。

「自分で出来る。」

こういうときの子供の瞳は真剣で真っ直ぐだ。だが同時にとてつもなく移ろいやすいのも46時中子供と接する湯子は知っていた。

「だめ。昨日も忘れ物したでしょ。」

湯子の答えは即答だった。

「お願い。絶対に、絶対に、もう忘れ物しない。」

何とか母親の許しを得ようと奈美も訴える。太郎はまだ子犬を追い

かけている。

「いいよ。お父さんが退院したらその子をもらってやる。」

「ほんと？。ほんとにほんと？」

奈美はまるで信じられないと言うように食いつくように同じ言葉を繰り返した。それに大きく頷いてやると奈美は愛くるしい笑顔を見せた。

「あなた。」

湯子がどうしていいものか思案して困ったような顔をする。

「大丈夫だ」

坂崎がそう言うのと湯子はそれ以上口を開かなかった。癌の告知は受けた。治療の基本方針も決まっている。基本方針。それは、癌との徹底抗戦だ。抗がん剤の投与と放射線治療。父も義父も癌と戦った。俺も戦う。そして必ず勝利する。子供たちは父親の病状を知らない。

「大丈夫だ。」

坂崎はもう一度そういった。

執行者、七鈴登場

七鈴は、暗い眠りの中から引きずり出されるように覚醒した。体は動かさないようにして、目玉だけをキョロリとさせた。

「今度はどこだ？」

10畳ほどの和室。自分が寝ているのはちょっと湿ったせんべい布団。押入れの額縁にナース服とピンクのワンピースとTシャツが掛かっている。横になった足元のほうに流し台とコンロが置かれた小さなキッチンがあり、その向こうには鉄製の扉の玄関があった。壁際にはスチール製の書架があり、数冊の医療書、CD、小説が並ぶ。棚の上には犬のぬいぐるみと化粧品、電話機が置かれていた。そして枕元には、小型の洗濯機ほどもある、馬鹿でかい通信機があった。いつものやつだ。

「ギーカタカタカタカタ」

ぜんまいを巻くような金属音とタイプを打ち込む規則的な音が部屋の中に響く。

自己診断をするコンピュータのように、さまざまなチェック項目をクリアして七鈴は徐々に目覚めていく。時代遅れの通信機が発する金属音と自分の頭の中のコンピュータ回路が猛烈に回転しはじめる音が重なった。嫌な音だ。

七鈴は許可無く忍び寄る金属音に舌打ちをして布団をめくり起き上がった。一つだけの窓からは茜色の光がカーテン越しに差し込んでいる。赤く染まったカーテンを開けるとすぐと脇を線路が走っていた。電車が走るための空間に夕焼けに染まった光の束が幾重にも折り重なり町に秋色の色彩を施していた。

「またきてしまったのか。」

七鈴は一人ごちた。手のひらを二度三と、開いたり閉じたりした。力を感じる。赤い光に手のひらをすかしてみると青白い血管が浮き出していた。

「私に血管があるなんてお笑いね。」

七鈴はじつと手のひらに浮かぶ血管を眺めた。

これを切れば私は死ねるのか？

死ねば私はこの無限から解放されるのだろうか？

西日は人間の心を沈ませる。そして、元、人間の心も沈ませる。

「ピーピーピーピー」

まるで警報機のような甲高い電子音を発し通信機はB5サイズの紙切れを吐き出した。断末魔のように紙切れを吐き出した後でブルリと震えた。その震え方が生き物のようで気持ちが悪かった。今はもう慣れた。通信機が生きていようが、生きてる通信機が存在しようが関係ない。私にとってこいつは <年代遅れの馬鹿でかいやつ>でしかない。

吐き出された紙切れは宙を舞い畳に着地した。七鈴は屈み込んだ。

「さあ、誰だ。」

七鈴は紙切れに手を伸ばした。

「死ぬのは誰だ。」

紙切は執行決定通知書と題が打たれその下に執行者と被執行者の名前が記載されている。

執行者 七鈴

被執行者 坂崎健一

そのほか、執行内容がこと細かく指示されていた。が、たいていのことは頭の中にはいつている。知らぬ間に入ってくるのだ。今回の設定は坂崎という男の担当看護婦らしい。

七鈴は鼻を鳴らす。

「そんな面倒な設定は必要ない。昔のように大鎌を持って黒いマントで人間を恐怖させればよいのだ。恐怖の内に命を刈り取る。」七鈴は大鎌をふるい落とす真似をした。その目は標的を捉えた猛禽類のそれになっていた。

今日は7月1日。執行完了は7月10日までの、10日間。

「10日以内に、坂崎健一、は、死、ぬ」

第四話

坂崎の担当医は橋本という50歳位の胡麻塩頭だった。橋本とは検査、治療方針で何度も顔をあわせていた。

国立がんセンターの呼吸器科部長という肩書きを持つエリート医師だが、素人にも分かりやすい説明と患者本位の治療、そして神技的手術を施す医師として院内外で定評があった。坂崎は運良く担当医が橋本に決定したが御氏名で入院してくる患者もいる。時々見せる小さな笑顔の中に橋本の人となりを見ることができた。

坂崎が国立がんセンターで腰をすえて治療に専念する決意ができたのは橋本への信頼が大きかった。とてもではないが、国家免許の交付を受けたばかりのペーパー医師の実験台になるのは御免だった。

今日は、いよいよ治療の日程が決まる日だった。

「正直なところ生死を賭けた治療、いや、戦いといったほうがふさわしいか。絶対に失敗の許されない戦いなのです。二日、三日の間を惜しむよりとにかく万全の体制でこの戦いに臨む、それが理想のほうです。今週一杯は検査をします。」

橋本は熱意溢れる口調で語った。そして橋本が宣言した通り入院して今日で五日目になる。毎日毎日検査に明け暮れた。そろそろ時間の経過にまどろっこしさを感じてしまう。たかが二三日、その二三日で治療が間に合ったり、間に合わなかったりすることは無いと言いつけるのだろうか？素人的な考えでは一分でも一秒でも早く治療を開始したほうが良い結果に繋がるのではないかと考えてしまう。この瞬間にもがん細胞は分裂し増殖しているのだ。回診は午前9時から始まる。入り口のスライドドアを全開にし時計と睨めっこをしながら橋本を待った。

橋本は顔だけを病室内に突っ込み「おはようございます。」と元気良く挨拶をした。

「おはようございます。」

坂崎は待つてましたとばかりにベッドの上に正座をした。橋元に続いて若手の医師がぞろぞろと5人も病室内に流れ込み息苦しさを感ずるほどの密度となった。

「坂崎さんお待ちせしました。治療への準備が整いました。治療は翌週の月曜日からでよろしいですか。」

治療日程が記載された4サイズの紙を受け取る。橋本は一応伺いを立ててきたが、もう嫌も良いも無いのだ。用紙に目を落とすと放射線治療という文字が嫌でもくつきりと浮かび上がってくる。放射線治療をすればどうなるか知っている。治療方針を決める際に橋本医師からも説明を受けていたし、坂崎は父、義父を癌で見取っている。3日間の放射線治療、3日間の休み。それを3週間繰り返し治療効果を判断する。父の場合はそんな手法がとられていた。父は1週間持たなかった。

「頑張るさ。」

見舞いに行くとなんだか緊張感のない、まるで他人事のように笑っていた父は目を瞑ったまま全く動く気配を見せなかった。死んでいるわけではない。しかし、どんな声をかけても反応を見せなかった。医者が現れたときだけ片目を開け力なく首を振った。

<放射線治療の副作用>

体質によつては非常に衰退する場合もある。治療の途中で亡くなることもある。父の体は治療に耐えられるタイプではなかった。ベットを見下ろす。そこにいるのは明らかに重病人だった。そして死をばらんでいることを痛烈に感じさせた。

「坂崎さん、頑張りましょうね。」

橋元は坂崎の手を取り大げさに振って見せた。

そして入ってきた時と同様にぞろぞろと医師が出て行くと開放されたような気分になった。

「いよいよ治療が始まる。」

医師の技量に任せた手術とは違い、自らに修練を課すような治療法

にやはりしり込みをしてしまう。我先にと走ってきたのに目の前の敵を見て急に恐れをなしてしまったようなものだ。早く治療を開始してほしい。だが今はどこも痛くも痒くもない。このままで済むものならこのまま逃げ出してしまいたい。溜息が漏れる。

「どうしてこんなことになってしまったんだろうな」

何度も何度も浮かび上がる同じ疑問が、またぞろ無限の輪廻を繰り返すように意識ののなかを席卷する。坂崎自身、答えなんか出るはずも無いのは良く分かっている。そこまで自製の崩壊は進んでいない。それでも考えてしまおう。こびりついたまま消えることが無い常にそこにある、具体的な死の影を。

「どうしてこんなことになったのか？」

手のひらの中の紙切れ。待ちに待った治療の日程。

泣きたい現実。

「おはようございます」

勢い良くスライドドアが開き、若い看護師が検診台を引きながらはいつてきた。看護師はベットサイドまで来ると頭を下げた。

「坂崎さんの担当看護師に決まりました、七鈴 香織 と言います。宜しく願います。」

坂崎は頭をかいた。すべてを引きずり出して頭の中を空っぽにしてしまったかった。坂崎は頭を抱えるようにして低くうなった。

「お父さんがんばって」

子供たちの声が聞こえる。俺が守らなければならない小さな命、そして俺を守ってくれる大きな命。不意に坂崎は目の前にいるはずの無い子供たちと手を取り合うように繋がりあつた気がした。立ち上がらなくてはならないのだ。藁でもなんでもいい。何かをつかみ、はいつくばってでも、この病魔から逃げ出さなくてはならない。足を滑らせれば真っ赤な口を開いた病魔に全てを吸い尽くされてしまう。立ち上がるのだ。前を見ていれば必ず光はなくならない。

「大丈夫、ですか？」

看護師はいぶかるように小首をかしげる仕草をみせた。

「ああ、大丈夫だ。」

坂崎は改めて看護師に向き合った。

「ななす？さんですか？」

「はい、漢数字の七に鈴で、ななす、と読みます。今日から坂崎さんの担当看護師に任命されました。宜しく願います。」

七鈴は深々と頭を下げた。つられて坂崎もあたまをさげる。七鈴の頭が持ち上がり視線が会うと息苦しさを感じるほどに圧倒された。視線を上から下まで走らせる。こういう視線を値踏みするというのだらう。目の前の看護師は驚くほど完全な顔立ちをしていた。上下左右が対称で崩れたところが無かった。美しいを超えて畏敬を感じさせる。坂崎の視線を笑顔で受けると、口元から八重歯がのぞき切れ長の瞳が解けるように緩んだ。

「坂崎さん、では体温をお願いしますね。」

仕事を始めると七鈴は急に真剣な眼差しになった。仮面を取り替えたように表情が変わる。体温計を受け取るときに僅かに指が触れた。<ドキリ>とした。

坂崎は思わず笑ってしまった。

「どうしたんですか坂崎さん、急に笑い出して？」

七鈴は八重歯をのぞかせてた。

「嫌、なんでもないです。ごめんなさい。」

中学生の子供のようだ。

「今日は奥様お見舞いにこられますか？」

七鈴が聞いた。妻は入院してから一日おきに見舞いにやってきていた。子供の学校もある。毎日見舞いに来るのは不可能だったし、坂崎もそれを望んではいなかった。

「そうですか。じゃあこの後、血液検査に行つて貰えますか？」

「分かりました」

七鈴は強く右腕を絞り血圧を測定している。

「128の92ですね。体温計いただけますか。」

必要事項を記入していく。七鈴は左利きだった。看護婦用の台車には、注射針、がビニールに包まれたまま無造作に置いてある。

<十分な凶器だ。人を殺すなんて造作も無い>

七鈴は注射針をじつと見つめた。

「注射するんですか？」

坂崎は聞いた。

「そうですね。点滴をするように橋本先生からの指示です。」

点滴静脈注射は静脈内に留置した注射針から一滴づつ薬剤を投与していく。看護師が行う最も医療者らしい行為の一つであり最も事故の発生する確率の高い行為だ。ひとたび事故が発生すれば生命に危険信号が灯る。

坂崎の目の前で注射器がビニールから取り出され点滴パックと繋がった。薬液がチュウプをつたい注射針に満たされていく。銀色の輝きを確かめるように七鈴は注射針を電気にかざし、軽くポンプを押し出した。注射針の先端から薬液が溢れる。

ふいに七鈴の顔が近づいてきた。腕をとられる。

「痛くはしませんから」

七鈴はささやくように言った。注射針が皮下に刺入されていく。坂崎は小さな痛みと僅かなめまいを感じながら自分の腕を眺めた。

「おとうさん。」

声がかか体が先か突然に奈美が飛び込んできた。続いて太郎が走ってくる、その後ろから現れた湯子が「ごめんなさい」という感じで頭を下げながら現れた。二人の子供は看護師の脇をすり抜け満面の笑顔でベットにダイビングをする。

「こら、看護師さんが仕事をしているだろう。」

坂崎はそういつて子供をたしなめたが全く迫力に欠けていることは自分でも分かった。何とか奈美はは現状を理解した様子でベツトから降り、太郎がそれに倣った。坂崎と七鈴は注射針をさしたまま手をつないでいた。

「元気なお子様たちですね」

七鈴は坂崎に笑顔を向け点滴を開始すると子供たちと視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。

「おねえちゃん、名前はなんていうの？」

「奈美です。」

怖気づいて母親の陰に隠れるようにして名前を言う。瞬間的に坂崎の脳裏に幼稚園児だった頃の奈美の姿がよみがえった。8歳になった奈美は実に堂々として答えた。

「坂崎 奈美です。8歳です。」

たったそれだけのことに坂崎は目頭が熱くなるほどの感動を覚えた。

「そう奈美ちゃん、宜しくね。お姉さんは、お父さんを担当する看護師の七鈴といます。」

奈美は七鈴に合わせて頭を下げた。

看護師が仕事を終わると湯子は頭を下げて見送り言い訳を始めた。

「奈美がどうしてもお父さんに合いたって言うから連れてきちゃった。あんまり奈美は我儘を言うほうじゃないでしょう。だから、たまには奈美の言うことを聞いてあげてもいいかなと思って学校を休ませたの。」

湯子は上目使いで坂崎をみる。坂崎は小学校、中学校といたって健康優良児で欠席日数が少ないことで表彰を受けていた。だから、少々の風邪で学校を休ませようとする湯子と难道か口論になった。

「今からでも学校に行かせる」

ついこの間までの坂崎なら湯子が恐れる返答を投げつけていたに違いなかった。今の坂崎はベツトによじ登る子供の靴を脱がし、犬の親子がするように抱きしめほほをすり寄せている。

坂崎は湯子に問題ないという合図の手を振った。湯子は坂崎が子供たちとこんな風にじゃれあう姿を始めてみた。仕事ばかりで、ろくすっぽ家に帰ってこない。子供が生まれた時だって立ち会わなかったし、おしめだって変えたことが無いかもしれない。お風呂に入れるのも、寝かしつけるのも、私の仕事だし、幼稚園の運動会にだって、小学校の入学式にだって、来たためしがない。録でもない父親だ。湯子は何度となく坂崎に異議を申し立てた。小言を言っても変化の兆しは見られなかった。だから離婚届をはさんで対峙したのだ。「あなたは父親としての自覚に欠けています。もう少し協力的になつてもらえないなら離婚も考えます。」

離婚届の妻の欄は埋まっている。
「俺は仕事をしている。育児、家事はお前の仕事だ。出来ないのなら」

坂崎はその先を口にしなかったが湯子にはそこから続くであろう現実を容易に想像することができた。

坂崎はネクタイを緩め背広を脱いでいる。

「お疲れ様。ご苦労様でした。」

一日外で働いてきた亭主を出来る限りの愛情で労をねぎらってあげたい。湯子は素直にそう思った。しかし、入学式に列席しないと、坂崎の態度がどうしても納得できないのだ。小学校の入学式は当然一生に一度しかない。その日に父親との記念写真が一枚もないというのはいかなるものなのか。

「俺は出来る限りやってるよ。」

「だったら、奈美の入学式に列席してください」

坂崎は溜息をついた。

「だから、何度も言うようにその日は大事な打ち合わせが入っているんだって。」

何度も聞いた打ち合わせと言う言葉がいつもに輪をかけて憎らしく聞こえる。

「お父さん、入学式に来てくれるかな？って奈美は心配してますよ」

坂崎はだんまりを決め込んでいる。不機嫌そうに眉根が寄っている。「あなた、最近いつ子供たちと話をしました？」

「話なら、今日の朝、挨拶しただろう」

湯子は溜息を漏らした。全く分かっていない。分かるうとしないのが無性に腹ただしい。

「挨拶じゃありませんよ。いつ子供たちとふれ合いましたか？いつ子供たちと笑いましたか？そういうことを聞いているんです。子供たちの好きなものを知っていますか？奈美がテストで100点取れたって、あなたに見せたときあなたはどうしましたか？太郎が父の日に書いた似顔絵をあなたはどうしましたか？」

不満の壺を開けてしまった湯子は感情が高ぶるがままに坂崎を責めた。

「あなたは父親としての責任を放棄しています」

判決を言い放つ裁判官のように湯子は坂崎を弾劾した。

「めんどくせー」

湯子は自分の耳を疑った。

「なんですって？」

「だから、めんどくせーんだよ。俺はお前や子供たちの為に一生懸命に働いているの。怒鳴られたって、しかられたって、理不尽に攻められたって、我慢して仕事に行くんだよ。全部お前たちのためなんだよ」

<お前たちのためだ>といわれては早々に湯子は反論できなかった。

「分かったら面倒なことを言うな。子供たちのことはお前がやれ」

ここで引き下がっては元の木阿弥だ。何とかしなくてはならない。感情論に入っではいけない。

「だけどあなたにも少しは手伝ってほしいのよ」

湯子は努めて冷静に言った。

「うるせーだから俺は仕事に行ってるの」

坂崎の言葉に思わずにらみつけてしまう。

「子供と仕事とどっちが大切なのよ」

怒りが鉄砲玉のように勝手に飛び出したようなものだった。いわなくともいいことを言ってしまった。湯子はすぐに後悔した。

「ちっ」

坂崎はあからさまに舌打ちをした。

「ごめんなさい」

「子供と仕事とどっちが大事だと！ どっちが大事だと答えてほしいんだ。えっ。子供が大事だったら仕事を放り投げても良いのか。」

坂崎は空気が震えるほどに怒鳴りつけた。

湯子は唇をかみ締め坂崎をにらみつけた。

「仕事が大事だったら子供たちを放り出していいの！！」>
湯子は言葉に出来なかった。悔しくて涙が出るのにそれ以上のこと
は言えなかった。

<馬鹿な人>

湯子はベットで子供たちとじゃれあう坂崎を見て涙ぐんだ。もともと優しい性格なのにそれを表現するのが人一倍下手な男。こんな病気になる前に仕事なんか放り投げて子供たちと楽しい時間を過ごせばよかったのに。

そのときすばらしいアイデアが浮かんだ。

「あなた、今週末は何か治療とか検査とかある？」

坂崎は少し考え無いと答えた。

「じゃあ、」

湯子はもったいぶるように十分な間を空けた。

「初めての家族旅行に行きましょう」

第四話（後書き）

執行者、七鈴が坂崎の前に現れました。次話より七鈴の執行がより具体的に見えてくる予定です。

坂崎の死は現実に訪れるのか？

つたない文章ですが読んでいただきありがとうございます
評価を頂けるととても嬉しいです。

第5話

湯子は家族旅行の提案が受け入れられると大げさなくらいに喜び、幸せを撒き散らすかのように両手を広げ喜びを表現した。担当医の承諾もすぐさまに勝ち取り、病院内にある雑多な小物を売る中村屋から、くちよと贅沢な大人の旅という本を購入してきた。坂崎の気が変わるのを恐れてか、病室を抜けると息をあげて雑誌を小脇に抱え瞬く間に戻ってきたのだ。

「早いな」

坂崎は驚き半分、あきれ半分で言った。奈美がお母さんはやい。という太郎が後れを取ってはならぬとばかりに「はやい、はやい。」と喋って笑い転げた。

湯子は額に垂れた髪の毛を掻き揚げながら「はい」と喋って雑誌をよこした。顔が近づくと、あきれたことに本当に「ゼーゼー」と息が上がって、軽いジョギングの後に顔が汗ばんでいる。

「あつつい」

湯子はハンカチを鞆から取り出し額に押し付けるようにして汗を拭いた笑った。

「そんなに急がなくても良いじゃないか」

「だってあなたの事だもの、気が変わると困るじゃない。忙しくって旅行なんて子供たちが生まれてから一度も言ったことが無かったじゃない。」

「確かにそうだな。忙しくって旅行どころじゃなかったな。」

坂崎はパラパラと雑誌をめくっていった。国内旅行が主体で、表題どおり一泊3万円以上の「ちょっと贅沢な」旅の専門誌だった。普段の坂崎ならもつたないの一言でお蔵入りである。

「たまには良いでしょ」

妻の言葉に坂崎は頷いた。

「たまには……か」

坂崎はやるせない気持ちで溜息を吐いた。何気ない些細な言葉にささくれ立った神経は引つ掛かりを起こす。癌を宣告されてから時間に対する観念が、ぐるり、と裏返るようになってしまう。細くて拙くても、自分の前には脈々と連なる流れがあった。羅針盤のように流れは道を照らし、その光の中からはみ出さなければ彷徨うことは無かった。それが生きるということだった。その流れが今、途切れようとしている。

たまには迷っても良いだろう。たまには、休んだってかまいはしない。すべて、終わりの見えない流れに沿っている安心感があるのだから、そこに戻ってくるのはいとも容易かった。今の自分にはたまにはない。もはやすぐそこで道は閉ざされている。一度はずれたら最後、足元が抜けるように奈落の底へとまっさかさまだ。

出来るだけゆっくりと溜息を吐いた。考えてはならないことだと自分に言い聞かせる。誰の道にだって終わりはある。ただ、俺は終わりを宣告されただけなのだ。ただそれだけのことなのだ。思考を遮り深い負の連鎖を断ち切るように、長く長く息を吐き出す。子供たちを抱きしめる。俺の羅針盤。俺を照らす家族。死ぬのは怖い。怖くて怖くて仕方が無い。

<死ぬのが怖くて自殺を図る>
そんな患者さんがいるのだと、橋元医師がこぼしたことがあった。なぜ自殺をしなくてはならなかったのか。坂崎には痛いほどに理解できた。

七鈴は早く執行を済ませてしまいたかった。

10日間の猶予があるものの、のんびりと構えてはろくな事が無い。早く執行してしまうのに限るのだ。うつつけなことに今回は病院の中で事がすみそうだ。突然の心不全により医師の懸命な介護にもかかわらず死亡にいたる。これだけのストーリーで十分だ。

医者の立会いの下で死んでくれるのだから、面倒なことは何も無い。
「執行完了」

その報告だけですべてにかたがつくだろう。これが不自然死になると状況は一変する。警察を呼び、事情聴取を受け、さらにはエージエントから事細かな報告書の作成を求められる。あの世の役所も形式にうるさい。特に警察に関わると報告しなければならない事柄が格段に増える。人間界のことなどすべてお見通しのはずなのに、調書の内容から、対応した警察官の個人情報まで調べ上げ報告しなくてはならないのだ。警察組織には、管轄区域の異なる多数のエージェントが潜入しているというのがもっぱらの噂だった。

七鈴は確認するように首から掛けている七つの鈴をナース服の上から握った。

<できることなら今日中にでも片をつけてしまいたい>

それが七鈴の本音だ。七鈴の執行方法は七つの鈴を順番に鳴らすだけでよい。七つ目の鈴の音が被執行者の耳に届いたときすべては塵気楼のごとく消え去るのだ。それは、今、立っているはずの現実々にポツカリと穴が開き足元から落っこていく。まさに落っこちていくという表現がピッタリとくる。本人は何も気づかず、スツと風を感じた瞬間にはおかしいと考えるまもなく漆黒の闇の中、生まれる前の何も無い世界へと帰還する。

七鈴は坂崎の消えた扉を見つめた。今すぐにも執行を済ませてしまいたいものの今はどうしようもない。
軽い溜息。

<自制しなくては。焦りは禁物だ>

「今週末、治療が無いそうなので仮退院を頂くことになりました。」

ナースステーションで坂崎湯子の言葉を苦々しい思いで聴いたのはつい先程だった。七鈴は担当医の許可が必要だと急いで湯子を制した。

「橋元先生の許可は頂きました。大賛成だと自分の事のように喜んでくださいましたよ」

七鈴は引き下がるしかなかった。

「それは良かったです。後で仮退院届けを病室にお持ちします。それと血液検査とレントゲンは受けてくださいね。」

患者を放射線課まで案内するのは担当看護師の仕事である。坂崎をつれてエレベーターに乗り込む。生憎なことに同乗者がいる。

< 執行は誰にも見られてはならない >

執行者に一任された任務の中で唯一の規範がこれだった。車椅子の老人から少し離れて二人は立った。エレベーターは地下二階に向かっている。ほかのボタンは押されていない。どうやら車椅子の老人も放射線科に向うのだろう。あわよくばエレベーター内で……とも考えていたがやはりここでは無理だった。七鈴は自嘲的に笑った。ここにはカメラが回っているではないか、たとえ誰もいなくても執行は無理だった。ふと老人が振り返った。

「「」苦労さん」

七鈴は面喰らった。老人の黄色くよんだ瞳は確かに自分に向けられている。締まりの悪くなった口元をいっそう緩めて唾液で光る口腔内を剥き出しにして笑ったのだ。七鈴は胸が締め付けられるような悪寒を感じた。

「どうしました、七鈴さん？」

坂崎の言葉にはっと我に返った。すでにエレベーターは目的階に着いている。車椅子は老人を乗せてカタカタと廊下を進んでいる。

七鈴は首をかしげ、車椅子に乗る老人の背中をにらみつけた。

七鈴が病棟に戻ると仮退院届けが提出されていた。本日金曜日午後より月曜日朝までとなっている。目的は旅行。七鈴は病室の湯子

に検査が終わるのが午後2時くらいになること、その後ならいつでも退院可能なことを伝えどちらに旅行ですかとさりげなく聞いた。

「館山寺温泉です。」

館山寺温泉なら東名高速をつかって2時間くらいだ。二泊の旅行にはちょうどいい距離かもしれない。

「楽しい旅行になると良いですね。」

湯子に向かってそっくり、しゃがみ込んでから「館山寺には遊園地もあるし、近くには海もあるんだよ。きつと楽しい旅行になるね」そういつてやると二人の子供は飛び上がって喜んだ。

「じゃあ、お父さんはもう少し時間が掛かるから、先に御飯を食べて待つてようか」

湯子はそういつて子供たちの手を引いた。

七鈴は気まぐれに母子の後を追った。徒歩圏内にはうどん屋しかない。きつとそこだろう。

医療スタッフ専用と書かれた裏口より病院を抜け出し建物の陰に隠れた。このままの姿では坂崎の妻にすぐに気づかれてしまう。

『ダイス』

小さく唱える。七鈴の体は見る見る小さく変態しつややかな毛色を纏った黒猫になった。

「ニャーゴ、ゴロゴロ、ニャーゴ」

七鈴は鳴いてみた。猫への変体は七鈴に与えられた特異能力の一つだった。気が付かれてはならない時に猫は便利だった。病院の外周を走り定期バスの停留所のある表玄関に回った。うどん屋は2斜線の道路の向かい側にある。母子が病室を出てからそれほどの時間はたっていない。大人だけならいざ知らず小さな子供がいる。うどん屋に入る前に見つけられる可能性は高いように思えた。バス停の屋根によじ登り見渡すと入院患者が作る花壇の前にしゃがみ込む姿を見つけた。花壇にはチュウリップが咲いている。二匹のモンシロチョウがついたり離れたり、絡まりあうようにひらひらと飛

び回っている。

「こんにちは」

という代わりにニャーゴとを鳴らして近づいた。最初に気が付いたのは小学校3年生の奈美だった。

「あつ猫ちゃんだ」

奈美は見つけるのが早いか早速に手を伸ばしてきた。そんな奈美の様子を一瞬にして観察した太郎が「猫ちゃんだ」と奈美と同じ言葉を吐き同じように手を差し出してきた。

七鈴は二つの差し出された手に背中を押し付けた。

「かわいい」

奈美が言うと、やはり太郎も「かわいい」といった。

二人の子供の向こう側に坂崎の妻、湯子が立っている。七鈴は腹ばいになり子供たちに猫がするような無防備な体制を取り湯子を観察した。ブルージーンズにノースリーブの茶色のセーター、手にした皮のバックは有名なブランド物だ。化粧化の無い顔は35歳にしては若若しい。二重のぱっちりとした瞳、長めのまつげが自然な感じでカールしている。薄めの唇にややとがったあごのラインは内に秘めた強さを感じさせた。しかし、瞳の下に色濃く残る隈や、皮膚の荒れ方からやつれた感是否めない。亭主が不治の病を宣告されたのだ。精神的に参るのも仕方が無い。

「悲しいのは今だけよ。あなただっていつかは死ぬのよ。」

七鈴は腹の毛を逆撫ぜにする子供たちに軽く手を絡ませた。生命力に溢れ、細胞の隅々までが生きていることを喜ぶ若い生命体。

「あなたたちだって同じよ。いつかは死ぬの」

そのとき湯子と視線が合った。可愛らしいものを見て目を細める代わりに、眉根が寄り目に力がこもった。湯子は猫を頭の前から尻尾の先まで何往復かねめ上げた。

「その猫から離れなさい」

厳しい命令口調の湯子の声に奈美と太郎はぽかんとして母親を見上げた。

「早く離れるの」

七鈴の腹の上に乗っていた子供たちの手が乱暴に払われ、覆い隠すように湯子は二人を抱いた。

「どうしたの、ママ」

突然の母親の行動に太郎が恐れながら聞いた。湯子はきつい視線を目の前の猫に投げつけたままだ。

七鈴は欠伸をしたり後ろ足で首筋をかいたりした。鈴が一つなった。しかし湯子の緊張は緩まなかった。そのまま母子に背を向け歩いた。背中には湯子の視線が痛いほどに感じられる。

<あの女は何かを気づいたのか？>

病院の建物の影まで行くと七鈴は振り返った。

湯子の視線は後味の悪い嫌な感覚を引きずるようだった。時々いるのだ。

執行者の正体を見破ってしまう人間が。七鈴は舌打ちをした。湯子の前世は死人だったに違いない。もともと死人だった人間はやはり死人の臭いを覚えているのだ。世間では霊感が強いといったりする。死人といっても色々と役割があり、死の時を告げる執行者。執行者を束ねるエージェント。執行の合否を判定する判定者、あの世からの伝達を伝える口述者、何らかの任務を背負った生存者という死人。そのほかにも死人は無数の職責を背負って存在すると思われる。しかし七鈴のような下級執行者には全体像をつかめるわけは無く自分と指令を出すエージェントだけがはっきりと浮かび上がりその他は霧が掛かりぼやけていた。しかし執行者同士では互いの存在に気が付くことができる。執行者仲間からの断片的な情報で七鈴は自分の住む世界を創造していた。

湯子は執行者ではない。それは間違いない。執行者ならすぐに分かるはずだ。湯子の嫌悪に満ちた瞳を思い出す。あの瞳には何かの疑惑が写ったはずだ。そうでなければ急にあんな態度をとるはずが無い。

気がかりなことが一つ増えた。無意識の内に舌打ちがでた。

>面倒なことにならなければいいが・・・・・・・・・・>

七鈴は裏口から病院内に入った。小脇にバインダーを挟んだ仕事中のナース姿に戻っている。

黒猫が消えた方向を湯子は呆然と見つめていた。黒猫は縁起が悪いといわれる。湯子は占いや迷信を信じるタイプではなかった。聞いてしまうと気にしてしまう程度で、自ら率先して自分の生活に取り入れるようなことは無かった。

だから、黒猫を見たって・・・

何か冷たいものを感じた。暗闇でポチャンと水の落ちる音に鳥肌を立てるように、危険だという信号が突然に襲ってきたのだ。

黒猫は建物の影に消えた。遅ればせながらの寒感に全身の皮膚がざわめいた。急に夫のことが気がりになった。

「ママ、大丈夫。」

しっかりと手を握る子供たちに湯子は精一杯の笑顔を見せた。

第5話（後書き）

ここまでお付き合いいただきましてありがとうございます。自分で書きながら締めりのない展開だと反省しています。次話からは、もう少しテンポ良くストーリーが流れていくように意識してみたいと思います。一週間に一度は更新したいと頑張っております。今後とも宜しくです

第六話

東名高速をおおよそ80キロ巡航で2時間ほど走ると、山中を切り開いた道路の脇から突然に現れる浜名湖の煌めく湖面に驚かされる。背の高い杉の木に遮られて全く気が付かなかったが、ずいぶんと海の近くを走っているのだ。陽光を反射して輝く水面と、湖面を縁取るような深い緑の対比が目にも眩しい。光を反射する角度によって万華鏡のように複雑な色彩を奏でるそのさまは、特大魚と光る無数のうろこのように見える。

湖面を跨ぐように大草山の山頂へ向ってロープウェイが運行し、遠く太平洋の雄大な光景と、静かに波打つ浜名湖が360度のパノラマで望むことができる。浜名湖では夏場は海水浴、潮干狩り、マリンスポーツ、釣り、と自然を相手にした遊びに事欠かない。納涼花火大会で館山寺温泉の客入りはピークを迎える。目の前で打ち上げられた花火を至れり尽くせりのもてなしで堪能できる。それは格別なる経験なのだろう。その日が終わると、翌年の同じ日の予約を入れていく客が多い。

「ようこそおいでくださいました」

坂崎が車寄せにハンドルを切ると、カツカツと軽快な下駄音を響かせながら紅い前垂れを結った仲居が駆け寄り、如才の無い笑顔をみせる。リゾートホテルという名が相応しい、大手資本の荘厳なホテルが浜名湖に沿うように並ぶなかで、坂崎が選んだのは館山寺温泉の中でも老舗旅館が並ぶ一画にある古い旅館、〈気楽〉だった。案内されるままにエントランスに進むと、上がり框で頭髪を銀色に染めた60歳程度の粹な大女将が、膝を折り坂崎家族を出迎えた。紅い絨毯と黒光りする太い梁に年代物の振り子時計がぶら下がり、古いながらも手入れの行き届いた感じに好感が持てる。たすきを斜めがけにし、着こなした和服姿は凜として貴賓をただよわせる。

フロント脇の一輪挿しに紫陽花が生けられている。重厚な空気を纏ったエントランスで軽く蓮っ葉な感じのする紫陽花が輪郭を際正せて生き生きとして見えた。

「もう6月か」

坂崎が独り言のように言うと「早いものですね」と湯子が言った。加藤医院でレントゲンを撮ったのはゴールデンウィークがあけた週だった。3週間近く病院に通いつめていることになる。

「いらっしやいませ」

若い仲居が奥から顔を出した。見たところ20代、いや、ひよつとしたら10台かもしれない。その腕の中に生けたばかりの紫陽花の花瓶が大事そうに抱えられている。まだまだ、幼さの残る愛くるしい笑顔を坂崎家族に向けて頭を下げた。

なるほど大女将のセンスでは紫陽花は難しいだろう。紫陽花の生き生きとした生命力は彼女のものか。

「あのお花すてきよね」

奈美が言った。若い仲居は一瞬キョトンとしてあわてて笑顔を動かした。

「おねえちゃん、素敵、って素晴らしい言葉を知ってるのね。お姉さんびつくりしちゃった」

「若女将。お客様に向ってお姉ちゃんは無いですよ」

大女将がびしゃりと言う。若女将は、つと大女将を見やると軽く頭を下げ、手にした紫陽花をフロントに置くと部屋へ案内する係りを買って出た。

三階建ての各フロアーには三部屋ずつの客室があり、坂崎家族は最上階に案内された。気楽はエントランスの反対側、背中側に浜名湖を背負うように立ち、どの部屋からも浜名湖の小波を感じることができる。そして最上階は特別室で、続き間になった和室と窓を開ければ専用の屋上露天風呂というもてなしだ。

「当館自慢のヒノキの露天風呂でございます。」

若女将が笑顔でそういう。やはり部屋の中にも紫陽花が生けられて

いる。一通りの説明を終えると若女将は部屋を退出した。退出間際にバイバイといって奈美と太郎に手を振り愛好を崩した。紫陽花の次はひまわりでも生けてしまいそうな笑顔だ。若女将が消えると子供たちが部屋の中を走り回った。備品を壊してしまつてはたまらない。すかさず湯子が子供たちを注意し坂崎に視線を送った。

「車の運転疲れませんでしたか？」

湯子が心配するのを制して坂崎は自らハンドルを取つて運転してき
た。

「大丈夫だ」

たかが2時間の運転ぐらいどうつて事は無い。坂崎は憚然として答えた。妻の言葉にはく病気なんですから無理をしないで>という意味が暗に込められている。余計な心配に、いい気はしなかった。しかし、坂崎自身にも若干の不安はあり車の運転に躊躇しかけた。しかし運転してみればどうということはない。感覚のおくれも無ければ、二時間の運転でさほど疲れも感じられなかった。

当然のことが当然でなくなつてしまつた癌の告知。

しかし、運転できたことが、自分の体がまだまだ病魔に犯されていないことの証のようで僅かに灯が灯るような希望を感じられた。たとえ僅かな光でもずいぶんと自分の心に余裕が生まれたことを坂崎は感じていた。

だからこそそれに水を挿すような妻の心配には腹ただしさを覚えた。

「余計な心配は要らない」

坂崎は交信を絶つようにびしゃりといつて、自分の声の大きさにびつくりした。またぞろゴロリとした不快な病魔がむくむくと顔をもたげてくるのようで硬く目を閉じた。

引き出しの中や、用意されていたお茶請けの菓子をあさつていた子供たちの手が坂崎の声に止まった。心配そうに両親の顔を覗き込む子供達。坂崎は「ハッ」と短く息を吐き、最高のの笑顔を作った。思考を切り替え無ければいけない。

「御飯の前に散歩にいこうか？」

不安に視線を泳がせていた子供達の顔がパツと明るくなった。

「それがいいわ。館山寺のお寺まで歩きましょうよ。ちよつとした山登りよ。奈々も太郎も歩けるかな？」

顔を曇らせていた湯子も坂崎の意を汲み取りそういった。

「歩ける。歩ける」

無邪気に笑う子供達はまるで天使のようだ。

気楽の料理は各部屋まで仲居が運ぶ本格的な懐石料理だった。坂崎親子の部屋にはあの若女将が給仕についた。

「先付けでございます」

先程のにこやかなもてなしと、うって変わり真剣な面持ちで料理を運ぶ。

先付けは遠州灘で揚がったシラスと、浜名湖産の天然車えびの塩焼き、牡蠣棚と呼ばれる牡蠣の養殖場に自生する青海苔の三杯酢和えだ。もちろん若女将が一つ一つ説明を加えていく。

「料理には力を注いでおります。ごゆるりと御堪能くださいませ」食膳に挨拶に現れた大女将が自慢するだけにはありなかなかの美味だった。天神蔵という浜松の地酒醸造元から取り寄せるという純米大吟醸は、山田錦を醸し熟成したまるやかな甘みと、上品な香りが鼻腔に抜ける一級品だ。

先付け、御椀、焼き物、と順番に料理が運ばれてくる。焼き物はやはり浜名湖産の鰻の蒲焼だった。あめ色に焼きあがったこんがりとした焼き目から、何代にも受け継がれるであろう特性だれと、脂ののこげた香りが漂い、生睡を飲み込むほどに芳醇な空気に包まれていく。裂きが3年、串打ち5年、焼きは一生。どこかの鰻やでそんな文句を目にしたことがあった。よく言ったもので、一生かけて勉強するほどこの鰻の焼きあがりには芸術的だった。鰻に箸を入れるとはらりと身が崩れる程にやわらかく天然うなぎ特有のぎゅっと詰まった旨みが箸を伝って溢れ出してくる。あわてて口に運び込むと、ほほが弛緩するほどに幸せが体中に広がった。少し甘めのたれ、カ

りつと焼きあがった皮、口の中で心もとなく形を崩すふつくらとした身、そして、なんといつても口の中に溶け出す、鰻本来の力強い旨みがまさに至福のときを醸し出す。

しかし鰻が半身しかなかったのが残念だった。瞬く間に平らげてしまふ。今回の旅行を館山寺に決めた大きな要因の一つに浜名湖産の天然鰻があつた。だから、まるまる一匹の蒲焼を平らげる贅沢を期待していたのだ。

そんな坂崎の不満を知ってか知らずか次の料理が運ばれてきた。「おやつ」と思う。またしても鰻だ。しかも先程のように芸術的に焼き上げられた鰻とはうって変わって、蒲焼を目の前にして料理人が逃げ出してしまったような、白く濁った仕掛かり品の貧弱な鰻だ。

若女将が坂崎の表情を見て満足げに頷いた。

「みなさん、びっくりされるんですよ」

坂崎の前に皿が置かれたが、やはり上手そうには見えない。スーパーマーケットにこんな鰻があつたのを思い出す。パックにたれがはいっていてご自宅で蒲焼にしてくださいというやつだ。まさか、部屋の中に七輪を持ち込み自分で蒲焼を焼かせるつもりではあるまい。それはそれで赴きもあるというものかもしれないが、焼きは一生なのだ。自分で焼いてうまくいく筈が無い。

「これは鰻の白焼きでございます。裂いた鰻を蒸してから炙る程度に焼き上げた物です。お好みで、わさび、生姜、をつけ、醤油でお召し上がり下さい」

若女将に進められるようにわさびを載せ、醤油をつける。蒲焼の身も柔らかかったが白焼きの身はさらに輪をかけて柔らかい。醤油の青黒い表面にパツと脂が広がる。それを見ると急にこの白焼きという鰻が上手そうに見えてきた。口に運ぶ。思わず溜息。いっきに広がる鰻の旨みに驚きだった。まさしく鰻の味だ。蒲焼よりもむしろ白焼きのほうが鰻そのものの味が舌を包む。ほのかに懐かしいような土の臭い、それが鰻の生態までも呼び起こさせる。そして、重厚な脂が口の中を支配していく。トロの比ではない。蒲焼のように特

製だれにおおわれた上品さは無いものの、野武士のような力強さが雄叫びのように味覚に響く。

「すごい」

素直に感想を口にすると、湯子も同じように目を丸くした。

「特上の鰻が手に入らないと白焼きはお出ししないんです。今日は、料理長もくめつたに目に出れない」と言うほどの鰻が手に入りました。お口にあうようで嬉しいです。」

若女将は本当に嬉しそうに顔をほころばせた。

腹八分目を越えたところで水菓子が運ばれてきた。坂崎は純米大吟醸の2合ビンを空にして程よく酔いが回ったところだ。これ以上は翌朝の胃の調子を考えると食べないほうが良いだろう。お子様ランチと言う名がついてはいるものの全く大人の料理に遜色の無い料理を平らげた子供達も水菓子までは手をつけることができなかつた。食事が終わり食器が引き下げられると急に部屋が広くなり、その中でぽつんと居心地が悪く取り残された気分になった。

「さあ、風呂にでもはいるか」

露天風呂は24時間並並と湯をたたえている。

我先にと子供達が駆け足で脱衣場に向かい足をばたつかせて洋服を脱いだ。

坂崎は子供達の脇を抜けるように脱衣場を迂回し直接に露天風呂へと向う。

「お父さんがいいーちゃん」

ざぶんと湯につかると、溢れ出した湯が白い煙になってもやを作った。

「太郎が一番が良かった。」

口を尖らせる太郎の隙をつき奈美が「私が二番」といって派手に水しぶきを上げて湯船に飛び込んできた。太郎は半べそである。その太郎を招き寄せ抱きかかえるようにして湯船に入れる。子供のしつ

とりと吸い付くような肌が、体に張り付き耳たぶが自然と鼻先にやってくる。子供特有の暖かい土から芽吹いたばかりの乳臭さ。青い香りに鼻先を擦り付けて自分の分身の臭いを感じ取った。

「これで最後かもしれない」

何をしても、飯を食っていても、寝ていても、夢の中でも、ふと気づくと考えてしまっている。いつでもどこへでも死の影は背中に張り付いたまま俺の後を追いかけてくる。

ひたひたひたひたと。

その恐怖からはどうしたって逃れることなんかできはしない。

「さあ、数えてやるからお風呂の中に潜ってみな」

坂崎は思っ出だしてしまった不幸の現実を受け止めることも受け流すことも出来ずにやむなく飲み込むように口を開いた。太郎は無邪気に湯船に顔を突っ込んだ。

「髪が濡れるから嫌だ。」

そういつてつんと、すましたのは奈美だった。浴槽の縁に腰をかけた「月がきれい」と大人ぶったことを言った。

食べすぎでポコリと膨らんだお腹と大人びた仕草の対比がおかしかった。奈美は子供から大人への階段を親の知らないうちに上っているのだろう。まるで駆け足のようなスピードだ。

そのうちに一緒に風呂なんて入れなくなるだろう。

「おい」とか「あんた」などと呼ばれ「くさい」と言って煙たがれるのだろう。親は目くじらを立てずに子供を信じて自我の芽生えを喜んでやればいい。きつと反抗期も駆け足で過ぎ去り大人になっていくだろう。やがて、純白のドレスに身を包み紅い絨毯の上を父親にエスコートされる花嫁になるのだろう。俺はおじいちゃんになって孫を抱き……。

やっぱり生きたい。

どんなことをしても生き延びたい。張り裂けそうなほどに体中が生きたいと願い、出口を彷徨う思いが熱い感情となってほほを伝った。あわてて湯をすくい顔を流すが、溢れ出す感情を止める蓋は今は無

かった。

子供達は風呂から出た後もしばらくは喧嘩をしてみたり、そうかと思えば額を摺り寄せるようにして一枚の絵葉書に落書きをしたりしていた。そして静かになったなと思うと、ぱたりと電池が切れたかのように眠りについた。太郎は少しくずった。湯子が太郎を寝かしている間、坂崎は露天風呂の脇に設置されたベンチでぼんやりとした。月明かりに照らされた湖面は無数の小波が創る波紋で永遠に揺らめいていた。軒を連ねたりゾートホテルの客室からの光は、蛍のように淡く水面で反射してやはり揺れていた。彼方では煌々と光を讚えた帆船が水面を切り裂き大きく旋回していく。船上パイテイでも楽しんでるのだろう。大草山は、自然の摂理に従うように闇夜に包まれ輪郭がぼやけていた。

湯子が隣に腰を掛けた。ちらりと見やると、物を言いたげな唇が僅かに開いて、出かけた言葉を飲み込むようにもう一度閉じられた。

「大丈夫だ。」

湯子の聞かんとした事は理解できた。

「あなた」

湯子は溜息のように暖色の声音をはいた。坂崎は湯子に向って大きく頷いて見せた。何に対して頷いているのか自分でも分からなかったが、今はそうするのが何よりも大切なことのように感じられた。湯子の手が坂崎の腿に置かれた。手のひらがそこを優しくなぞる。その手の動きを坂崎はじつと眺めた。不意に湯子の唇が近づき坂崎のそれと重なった。軽いキス。極間近で視線が絡まると、何も語らずともお互いの意思が疎通するように感じられる。瞳の中から、周りに育った無数の笑い皺さえもが雄弁に訴えかけてくる。ためらいながらも湯子は坂崎を求めていた。

軽いキス。何度も何度も唇を重ね吸い付いた。浴衣の襟元が緩みそこから乳房の谷間が月明かりに白く浮かび上がった。着衣の上から

なぞるように乳房をもむ。十分な弾力と重みが掌のなかをジンワリと広がった。徐々に硬さを増す乳頭の盛り上がりを感じると湯子の腕が肩にかかった。浴衣を重ねた襟元がよりはだけ、年の割りに形崩れの無い乳房が片方だけポロリと露になった。僅かな小波が奏でる音がすべての荒事が過ぎ去った後の静かな余韻のように響いている。はみ出した乳房をさすると風呂上りのさらりとした皮膚が艶を増すように色を挿した。さらに浴衣を引くと月の自然色に反射する肌が乳白色に染まり、疲れた女がつかまるように肩口に浴衣が引つかかった。そこからは片乳が溢れ、露になった太ももの奥からは恥毛につづく産毛が僅かに光りを称えている。妻を目の前に立たせ、両肩に手を回し肩から浴衣を外す。衣擦れが響き足元に浴衣はまるまった。妻は一糸纏わぬ姿になった。微弱な月明かりは妻の色白さを浮き立たせた。自らの手で秘所を隠し、赤面しうつむく姿は三口のビーナスを思い出させた。女は若い方がいいという。しかし胴回りにたまった贅肉、首下に出来た皺。枝垂れた感じも女の円さの象徴だと思えば決して悪い物ではない。むしろ美の象徴でも在る。

欲望の赴くがままに乳房を揉み腋に鼻を押し付けた。石鹸の香りにまじり僅かに体の温もりが鼻腔に届く。それは世界で最も自由にする事ができる女の臭いで、もつとも自由に振舞える女の臭いだ。何度も嗅いだことのある体臭。乳房を下がり、胴回を迂回しごわついた恥毛にわけいると暖色に染まった声が、墮ちるように間延びして吐息になった。濃密な体臭が密度を増すごとに頭の中は空っぽになつていく。生殖器に指をはわせると熟れた果実が雫を垂らすようにじつとりと湿り気を帯びている。ヒダにあわせた指先が穿つた秘部の中に滑り込むと体の底から這い出すような溜息が妻の口から漏れ背を反って坂崎の頭が強く抱かれた。指先を送出する度に淫らな音が生殖器から揚がった。包み込まれた中指を抜くと発情に色付いた妻の瞳が懇願するように坂崎を見下ろしている。汗ばんだ肌が吸い付くように張り付いている。案内するように妻の腰に手を掛け下に向ける。妻の体が降りて宙を向いた坂崎の生殖器に向ってくる。妻は自

らの手で坂崎の一物を掴み自らの性器に押し当てた。ゆっくりと腰が下がりじんわりと熟れた柑塙のヒダに絡めとられるように座位で挿入した。深い溜息が同時に上がる。擦り付けるように湯子の腰が坂崎の上で踊り咽び泣くような吐息が顔に掛かった。躊躇うことなく食いつくような口付け。妻の舌先が唇を割って入ってくる。吐息にあわせるように坂崎は腰を振った。妻の体が跳ね上がり獣のような悲鳴が上がる。何度も何度も繰り返す。果実は破裂して坂崎の太ももにまで果汁が溢れてくる。

断末魔の雄叫び。挿入したまま荒い息を整えると、湯子の表情が雌の顔から貞淑な妻の顔へと変化していく。霧が晴れるように張り詰めていた濃密な空間が四散して、湖面の小波が耳に届くと急に恥ずかしさを覚えた。湯子が立ち上がると挿入された性器がこすれ女の声の名残が僅かにこぼれた。そそくさと着衣を身につける妻。その背中を見るといつにも増して、その体が、その女が、愛しく思えた。

「何か飲みますか？」

湯子が振り向いた。

第六話（後書き）

第六話目までお付き合い頂きありがとうございます。第五話で読者数300人を超えました。ありがとうございます。

さて前話後書きで物語の展開スピードアップを宣言したばかりなのに、またまた寄り道をしてしまいました。反省。

今週中に次話を更新する予定でいます。よろしければ、またお付き合い下さい。宜しく願います。

感想、評価、頂けると嬉しいです。

でわでわ。

第七話

七鈴は館山寺の大草山ロープウェイ搭乗口の急勾配に尖った屋根の上に行った。そこからは、浜名湖の湖面と、リゾートホテル、そして、旅館、気楽、の最上階が遠く見通せた。月明かりが微かの輪郭を照らし出してはいるが、もともと黒い体毛に覆われた黒猫である。傍目に気づかれる恐れは無かった。気づかれたとて、猫が屋根に上っているだけである。どう、ということは無。大草山の斜面をすべり湖面をさらった風が心地よく吹き付けてくる。風に吹かれながら七鈴は坂崎の交尾を眺めた。

「あん、気持ちがいい」

「もつと、突いて」

「頭が変になっちゃう。」

坂崎の妻、湯子の表情はいつか見たアダルトビデオに出演する女優とそっくりな顔をしていた。人間は46時中、年中無休で発情する稀な生物である。一度、人間で無くなった七鈴には、その色情が異常に思えてならなかった。七鈴に欲情は無い。それどころか食欲も、睡眠欲も、人間の主だった本能的な欲求のほとんどを持ち合わせていなかった。死人になった時に無くしてしまったのだ。人間には108つの煩惱があるという。実際にはそれどころの数ではないだろう。

私は煩惱の変わりに永遠を手に入れた。とどきたたき起こされ、こうして任務に付かなくてはならないこともあるが、それは極稀なことではほとんどの時間を安らかな眠りに捧げる事ができた。

七鈴には人間だった頃の記憶が無い。そのすべての記憶を遠い彼方に置き忘れてきたようにポツカリと頭の中に孔が開いたように思っ出せなかった。きつと幸せな人生だったに違いない。そう思いたい。が、何かの罰を背負った人生だったはずだ。殺人か。それとも詐欺か。だからこそ、いつまでもこうして死に切れずに人間界と冥

界との臨界点で彷徨わなくてはならないのだ。

永遠に。永遠とは降ろせぬ十字架を背負うのと同意語だ。

単調に腰を振っていた坂崎の動きが止まった。

「やっとおわったか」

溜息を付いた。猫が溜息を付くとは、おかしなものだ。七鈴は一人ごちた。

「お疲れさん。」

暗闇のどこからか声がして七鈴は一瞬身構えた。建物の影からカタカタと音がする。

人間だ。

七鈴は闇の中に自分の体を隠すように身を低くして様子を伺った。

「そんなに怖い顔をするなよ」

影の中から銀色に輝く車輪が見えた。全身の筋肉が緊張して体毛が無意識に逆立っていく。

「何者だ？」

七鈴は問質す様に聞いた。人間界で死人の存在に気が付く者は極稀だ。ほとんどの場合は執行者仲間だ。しかし

執行者同士は一種のテレパシーのような物で結ばれお互いの存在をいち早く気づくことができる。暗闇で背後から現れるようなことは決してない。

カタカタと車輪が回る。

「それ以上近づくな」

七鈴は威嚇をこめて低く唸った。ヒュルリと一陣の生暖かい風が吹いた。

「別にとって喰おうというわけではない。鬼でもない。」

声は男だが姿はまだ見えない。声の中にこちらの反応を楽しんでいるような余裕が伺える。

「姿を見せる。」

七鈴は首に掛けた鈴を握った。相手が人間だったらこの鈴で殺してしまえばいい。

「わしゃ、人間ではないぞ。そんな鈴で、わしを殺すことは出来ん。」
車輪がゆっくりと回転を始めた。

「それにしても、最近の連中は勉強が足りんの才。死人同士のコンタクトがとれんとは嘆かわしい。」

姿を現したのは車椅子の老人だった。七鈴は「はつと」気が付いた。ターゲットの入院した病院のエレベーターに同乗した男だ。あの時も確か「おつかれさん」そういわれたはずだ。

「思い出してくれたようじゃな。」

老人は歯茎を剥き出しにして笑った。車椅子は徐々に距離を詰めてくる。そして、ひよい、という掛け声で七鈴の居た急勾配の屋根の上まで飛び乗ってきた。屋根の角度に合わせて車椅子は斜めになる。老人も重力を無視した不自然に斜めな体制をしている。それでも落ちることは無い。斜めに傾いたまま車椅子はカタカタと車輪を回転させた。

「そんなに驚かんでもいい。こりゃあ、わしに与えられた特殊能力の一つじゃ。お前さんが猫になれるように、職業柄わしはどこへでも昇ることができるのだ」

老人の姿は仮の姿で、おそらく今回の任務を遂行するためにたまたま老人になっただけだろう。

「たまたま老人になっただがこの体が思うように動せん感じはつらいの」

七鈴の思考を先回りするかのようにつつ早く言葉を出してくる。読心術か。

「それ以上、近づかないで」

七鈴は老人を制した。

「死人仲間だというのは認めよう。だからそれなりの敬意は示そう。しかしだ。」

「何をそんなに恐れておるのじゃ、わしらは死人じゃ。失う物は何も無い。」

老人の車椅子が七鈴の横で止まった。抗う事ができなかった。

「お主は、まだまだ若いのう。」

その視線は気楽の最上階に向けられている。

「わしらは死人じゃ、もはや失くす物は何一つとて無い。命も無い。本能も無い。限られた時間も無い。失くす物が無い者は恐怖を感じることも無い。わしは、お主から何かを盗むことは出来ない。何か危害を与えることも出来ない。精神的にも、肉体的にも、だ。」

「失う物が無ければ、恐れることは無い。全てをありのままに受け止めても困ることは無い。違うかね？」

七鈴は黙った。自分が持っているもの、なくしては困るもの、それを思い出そうとしたが老人の言うとおり自分には何一つとして持ち合わせは無かった。

「そんなことは分かっている」

せめてもの虚勢を張った。得体の知れない老人にありのままに受け止めるといわれても「はいそうですか」とはいかなかった。

「おぬしはまだ人間臭いの」

「私は執行者だ。十分な経験をつんでいる」

執行は今回で5回目だ。

「回数ではない、人間としての習性が抜けきれておらんのだ。たとえば、暗闇から現れたわしに心底おぬしは震えておる。それを悟られまいとして虚勢を張って強がっておるが、それは人間が自分の領地や、自身をよそ者から守るために本能的に備えられた防御だ。

防御とは何かを守るためにするものだ。おぬしは何を守っている？」

「私は任務を遂行することだけを考えている。それを邪魔立てするものは許さない」

唯一の武器を握り締め七鈴は答えた。

「わしは、おぬしの任務を邪魔立てする気など毛頭ない。しかし、おぬしの心の荒れ具合が気になっただけだ。わしにもそういう時期があったのう。いつまでもおぬしのように闇を背負ったままでは気の毒に思えていらぬ老婆心を働かせただけじゃ」

老人は軽い溜息をはいた。

「わしも死人だからな。もはや数十年、いや数百年か、死人として生人の世界を彷徨い続けている。死んだ直後は、やはり、今のおぬしのように生物だった頃の記憶、本能が、残っている。だから色々な事に恐怖を感じたり、自分の置かれた境遇に絶望したり、残してきた家族に会いに行こうとか、恋人を探して彷徨ったりしたもんだが、段々とそんな物に意味が無いことに気が付いてきた。家族を探したとて、僅かには手がかりを感じた。ここは見たことがある。なんか懐かしいような。そういう感覚的な手がかりを何度となく味わった。心もとないが小さな破片を集めていけば、いつか人間だった頃の自分を思い出すことができるかもしれない。家族に会えるかもしれない。胸が高鳴ったよ。あわよくばもう一度生き返ることができるかもしれない。なんて事を本気で考えていた。完全に消滅しないで、死人になれて良かった。本心でそう思った。執行者によって、まるで死ぬことを喜んでみたいに穏やかな微笑みを称える無数の亡き人達が哀れに思えて仕方が無かった。運び人を選ばれたことに感謝の涙をこぼしたものだ。だが、」

老人は言葉を切った。老人の黒い瞳は七鈴を飲み込むように丸々と膨らんだ。

「死人とは、やはり死人なのた。いくら、過去をほじくり返したところで、誰もわしに気が付きはせん。たまたま偶然、昔の恋人を見つけたこともあったが、その女はわしの目の前で別の男と交尾を始めた。全ては死んでいるんだ。過去もなければ希望を抱く未来もない。……時間とは物の変化を表す概念だ。わしらには時間が無い。変化が無い。変化が無いなら恐れることも嘆くことも無い」

七鈴はじつと老人の話に耳を傾けた。年老いた老人の戯言だと一笑に付すには、まさに自分の心の中に影を落とす理由がそこに在り引き込まれてしまった。

この世界の歪に一人ぼっちで取り残された孤独を誰かに聞いてほしかった。七鈴の置かれた境遇と老人の境遇はあまりに近かった。そ

して孤独はあまりに深かった。

「私は執行者、七鈴」

七鈴は改めて老人を見た。敵対心は薄れ、惹きつけられるような親和性を感じた。しかし、それを表すには時期尚早だった。

「わしは運び人の緒方だ。生人の世界では天使、なんて呼ばれている。」

「老人の天使なんて始めてきいた」

「現実と理想には往々として開きがあるものだ」

七鈴は笑った。仲間と話をするという感覚がずいぶんと久しぶりだ。じつと立ち尽くしていた荒野の果てに、寄りかかる樹木を見つけたようだ。

「われわれに、希望は必要ない」

老人はびしゃりといった。七鈴は「どうして」そう叫びそうになるのをじつとこらえた。

われわれはもともと人間だった。人間らしく在りたい。人間のようになりたいと思うのにどんな理由が必要なのか？生きる上で希望は必要不可欠な要素だ。

「われわれは生きてはいない。死んでいるのだ。」

老人の瞳から抑揚が消えていた。私情の一切を排除したただ命令を確実に遂行する軍人のような威厳だけが漂っている。

「わたしは、元人間として人間らしい感情を持っていたい」

七鈴が言い切ると老人の目がさらに険しさを増した。

「人間らしくなどと無理なことをするではない。人間とは生人の事を指す。死んだ人間のことではない。まして元人間を指す言葉ではありえない。希望を持つな。夢を見るな。そんなものにすがっているから、それに見捨てられたときにどうしようもない苦しみに襲われるのだ。すべてを、甘んじて受け止めるのだ。さすれば道は自然と開けん」

七鈴は老人の言うとおりの甘受してきた。しかし、苦しみは癒える事は無い。

「私達はなぜに永遠に彷徨わなくてはならないのか？あなたは考えたことがあるか？」

七鈴は老人に聞いた。

「そんなことは考えなくても良い。われわれの世界には時間とびう観念は通用しない。なぜならば<変化>が無いからだ。動くもは動きつづけ止まってるものは止まり続ける。それが死人の世界だ。

そして、命受けた死人は動き続けなくてはならない。止まることは許されない。たとえそれが、永遠に終わることの無いメリーゴーラウンドだとしても、だ。わかるか？」

そんなことは分かっている。分かっているからこそなのだ。

「誰かにすがろうなんて考えるな。われわれは一人だ。群れは必要ない。」

「そのとおりだ」

七鈴は老人の瞳を睨み返した。同じ境遇だろうと、死人だろうとそんなものに意味が無いことは分かっている。

同じ谷底で遭難しても決して助け合うことはしない。自力で這い出すことができるものだけが正しいのだ。

「ほほう、なかなかいい面構えをしているの」

老人は笑った。その笑顔に親近感を覚えることは無かった。自分の心の隙が恨めしかった。

なぜに。どうしてなんだ。

老人の瞳がぐるりと回り七鈴に一瞥をくれるとにやりと笑ったようだった。

<理由などない>

老人の声が聞こえてきそう。

「わしの客もあんたと同じあの男だ」

七鈴は驚いて老人を見た。

「坂崎 健一か？」

「そうだ、七鈴さん、あんたが執行してわしが運ぶ。見たところあの男はわれわれが手を下すまでもなく、間も無く死を迎えるはずだ。

彼の体は十分に癌に侵されている。どうして、わざわざ、任務が発令されたのかは分からんが今回は共同作業となりそうだ。宜しく頼む」

私は執行者だ。七鈴は目を瞑った。いつものやつがやってくる。

七鈴の頭の中のコンピューターがノイズをかき消すように回転を始めた。

それは突然にやってくる。

強烈な速度で頭の中がかき乱され思考が混乱する。しかし慌てることは無い。いつものことなのだ。われわれ死人には道が用意されている。その道から反れそうになるとこいつがやってくる。

ソフトがダウンロードされ、モニターにこれ見よがしに文字が浮かぶ。それは強烈なインパクトをもって私を締め上げる。

私の本能は今も生きている。

私は遅滞なく執行者としての任務を全うする。

私にはそれが全てだ。

私には弱みは無い。

私には恐怖も無い

七鈴は自分の体の芯が急速に冷えていくのを感じた。

私は執行すること、つまり<人間を殺す>事だけの為に存在を認められた死人である。なにも迷うことは無い。淡々と仕事をこなせばそれでいい。人間のように右往左往することも無い。選択肢は無い。常に過程から結果までが絶対の力の元で決められている。私はそれに反って行動する。

ワ・タ・シ・ノ・イ・シ・ハ・ソ・コ・ニ・ナ・イ

「私の名は執行者、七鈴。明日中に執行をすませてみせる」

七鈴は声高に宣誓した。

第七話（後書き）

つたない文章では在りますがここまで読んでいただき本当にありがとうございます。
とうございます。

さて第七話では七鈴の心の闇に少し触れてみました。そして、次話
でいよいよ、坂崎の執行に取り掛かります。わくわくが半分、概要
が定まらない焦りが半分です。

よろしければ感想を書いていただけると勉強になり、励みになり、
次話への執筆の活力となります。宜しく願います。

第八話

子供達は小さく寢息を立て安らかに眠っている。妻はそんな子供達の寝顔を並べた布団から眺めている。坂崎は音を立てずにふすまを閉め続き間の電気をつけた。久方の妻との秘め事に心地の良い倦怠感が体を覆っている。冷蔵庫から玩具のようなウイスキーのミニボトルを取り出し蓋を開ける。12年ものワイルドターキーをゆつくりと口に含む。息を止め、喉元に送りこむと強く熱いアルコールの刺激が広がる。そつと鼻から息を吐き出すと芳醇な香りが一気に駆け巡った。

「ふーっ」

自然と溜息が出て座椅子に背を預けた。医者からは、煙草も、酒も控えるように忠告を受けている。煙草は止めた。今日だけは酒を解禁した。テーブル上の館内案内の冊子には、旅先から郵送するための絵葉書とルーズペーパーが挟まっている。そこからルーズペーパーを取り出し、同じく挟まっているボールペンを握った。一度握ったペンを放し指先でもてあそび宙を見つめる。窓からは、僅か満月に欠けた月と、大草山の頂に位置するゴンドラの駅舎がおぼろげな輪郭でたたずんでいる。

ペンを握る。

<愛する家族へ>

一行目にはそう書いた。愛する家族へ。坂崎は何度も同じ言葉を頭の中で反芻してみる。襖を一枚隔てた隣の部屋には、まさしく自分の愛する家族がいる。私は、その家族と離れなければならないかもしれない。むしろ、そうなる公算の方が高いのだろう。だったら、いま自分が何をしなくてはならないのだろうか？その疑問は、日を追うごとに坂崎の頭の中で大きくなっている。決して、癌を克服して生存する、その道を諦めた訳ではなかった。週明けから始まる治療に全精力を注入する覚悟でいる。が、しかし。

自分が死ぬという概念が心の中で徐々に形成されていくのを坂崎は認識していた。自分が、死ぬかもしれない。

その現実に驚き無く対処できている。

<自らの死>

子供達はまだ小さい。奈美は8歳、太郎にいたっては、まだ3歳で幼稚園に入園したばかりだ。おそらく、このまま自分が死ぬことになれば、太郎の中に残る父親の記憶は極限られたものになるだろう。まだまだ2人とも父親に甘えたい盛りだ。

わたしは、家族のために何を残せるだろうか？何ができるのだろうか？そして、私の生きた証はあるのだろうか？あまりに時間は限られている。

坂崎は、頭を振った。考えれば考えるほど頭の中が混乱し、思考は四散してしまう。どの道を通っても袋小路の中を右往左往するだけで結局答えにはたどり着くことがない。

ペンを握りそれを走らせる。

父親として、旦那として、そして、坂崎健一という個人として、今思うことを記す。子供達に、今すぐに理解してもらうことは望まない。5年後、10年後、人生の岐路に立った時に、私は手を差し伸べることも、相談に乗ってやることも出来ないかもしれない。そんなときに、僅かでも道しるべになればいい。ありったけの愛情を文字に託していく。

あなた達は、愛されて生まれ、愛されて育ってきたのだ。

今、出来る全てはそれを伝えることだ。

書き出せば、伝えたいことは無限にある。その全てを伝えきれないことに歯がゆさを感じる。家族を思うと無数の記憶が鮮明な画像になって次々と蘇って来る。

風邪を引いて寝込んだこと。父の日に似顔絵を送られたこと。おぼつかない足取りで初めての一步を踏み出したこと。パパと呼んでくれた事。

運動会のかけっこで一番になったと喜んだ顔。運動会にも行ってや

ればよかった。出産にも立ち会えばよかった。入学式にも、入園式にも……。

ペン先が震える。文字が滲む。もう遅いのか？

「いや、そんなことは無い筈だ。まだきつと間に合う」

坂崎はともすると踏み抜いて落ちそうになる心を支え、ペンを走らせた。

今出来ることを。

どれほどの時間が経過したのだろうか？ペンが止まったときには窓の外が霧が立ちこめてようにまだ弱弱い明かりに照らされていた。

「夜明けだ」

歩み寄りまどをあける。まだ冷気を感じる6月の朝の気が部屋の中に流れ込んでくる。今日は子供をつれて遊園地に行く。雨の心配はなさそうだ。子供達の喜ぶ顔が目に見えた。

手紙を封筒にしまい住所を記入する、それをさらにもう一枚の封筒に入れ幼馴染の佐藤の住所を記す。彼は坂崎の病気を知らない。

もし万が一自分が。

坂崎は自らを鼓舞して言葉を出した。

自分が死んだらこの手紙を家族に送ってもらおう。それまでは佐藤にこの手紙を託しておく。事情を深く説明することも必要ないだろう。彼なら、私の意図することをすぐに理解してくれるはずだ。

フロントに下りて投函タイプのボックスに手紙を置く。思いの丈をこめた手紙である。手元から離すのに戸惑った。この手紙が家族に届くときは自分はこの世にいない。こんな手紙が届かなければ良い。

逡巡しながらも切り離すような思いで指を離した。しばらくはそこから動けなかった。

意を決して背を向ける。浴衣の内ポケットにはもう一通の封書がある。これは、自分に向けての手紙だ。今思うこと、そして、漏らしてしまいがちな弱音を命一杯に書いた。これでもか、これでもかと

つづつた負の想い。書ききつたせいでずいぶんと気持ちが悪くなった。しかし、この封書をいつまでも、持ち歩くわけには行かない。吐き出した弱音はとっと処分するに限る。そうしないと滲み出した弱音がいつ忍び寄るか分からない。

そして、この手紙の処分は自分が絶対に負けないための大切な儀式なのだ。

旅館の下駄を履き表に出る。寒さは感じない。めくつたばかりの今日という新しい一日の始まりはすがすがしいほどに澄んでいる。まだ観光客が出歩くには時間が早い。白衣を着たまだ若い板前が小走りに通りを掛けていく。それ以外には静かだった。浜名湖の湖面は休むことなくまるで息吹くように小波を打ち寄せている。

坂崎は自動販売機でペットボトルのお茶を買った。半分ほど飲み残りは捨てた。空になったペットボトルを持ち小波の打ち寄せる海岸へ歩いた。小さな木製の栈橋が掛けられた脇で封書を取り出した。あて先は書いてない。

誰に届くことなく静かに葬ればよいのだ。最初は小さく端を折り、筒状になるようになってくると丸めた。それをペットボトルの中に忍ばせる。狭まった首元を通り過ぎるとペットボトルの中で手紙は広がった。一度逆さにして振ってみる。かさかさと紙がこすれる音がするだけで堕ちてくることは無かった。

「よし。」

坂崎は栈橋を歩き先端にむかった。透明度の高い海水が底の砂地を揺らめかせていたが、栈橋の先端まで行くとさすがに深い水深に抗まれ底まで見通すことは出来なかった。深い緑色の海水がゆっくりと上下し、たゆたっている。海水の流れは引き潮になれば太平洋に向って流路を造る。その流れに乗ってこの手紙は永遠に旅を始めるだろう。二度と私の手元に戻ることは無い。

弱い心は捨ててしまふ、もう弱音ははかない。与えられた運命ならそれはそれでいいだろう。私の出来ることは精一杯の抵抗だ。

来るならこい。俺はは逃げも隠れもしない。

坂崎は力一杯にペットボトルを投げ捨てた。放物線を描いたそれは静かに湖面に着水した。坂崎はそれを見届けることなく歩き出した。二度と振り向きはしなかった。

棧橋の元で車椅子の老人が一人湖面を眺めていた。坂崎は軽く会釈をしてその脇を通り抜ける。老人の膝の上で黒猫が背を丸めてこちらを見ていた。首元に複数の鈴がぶら下がっている。警戒心を露にした黒猫は背を丸め爪をむくように鋭い視線を投げつけてくる。

「よしよし。大丈夫だ」

老人は猫の背をさすり落ち着かせようとした。

車椅子の車輪がカタカタと鳴った。

第八話（後書き）

ここまでお付き合いいただき、まさに感謝・感謝・感謝・感謝であります。

さてさて、七鈴さんですが、なかなか坂崎に対する執行を現実にしてくれなくて作者自身困っております。あっちにふらふら。こっちにふらふら。（汗）

次回作こそ、七鈴の鈴の音一閃で執行を行います。お付き合いくださいませ。

評価、感想頂けると嬉しいです。でわまた。

執行完了

七鈴は七つの鈴を首から下げ、死者の運搬人、緒方の膝の上で丸くなった。人間の姿に戻るのには今回は得策ではない。その姿をターゲットである坂崎に知られているからだ。いらぬ騒ぎになりかねない。

坂崎が何を目的に旅館から朝早くから出てきたのかは定かではなかったが、夜明けを迎えたばかりのこの時間である。執行を済ませるにはこの上ない時間帯に違いない。砂浜に掛かった栈橋の先から坂崎が歩いてくる。

この瞬間を待っていた。朝露を纏うように鈴が鈍く銀に輝いている。ゴロリと喉がなった。

壱の鈴を念ずる。

ちりん

と、乾いた音が海風に乗る。壱の鈴は虚栄を意味する。虚栄とは、人間の持つ七つの大罪の一つであり、人を罪に導く罪源でもあった。鈴の表には人間が神との約束を違えた7つの罪源の名称と絵画が記されていた。人間を中心にした曼荼羅には、七つの罪に導く悪魔が各々の持ち場でそれぞれの曼荼羅を形成し、その主として宿っている。壱の虚栄には悪鬼ルシファーが相当し、罪深き人間が罪を犯すのか、罪深き人間が作り出した悪鬼が罪を犯すのか、最後の審判に懸けられる人間の苦悶の表情が描かれている。

どちらにしても人間は罪深い。
人は人を殺める。

それが答えだろう。坂崎も身体の中に悪鬼を宿しているはずだ。そして、それは私も同じだ。悪鬼を宿した者にはいつか必ず破滅が訪れる。

栈橋を歩いてきた坂崎がすぐ脇を通り過ぎる。通り過ぎざまに坂崎は笑顔を見せて頭を下げた。死神に愛想を使ってどうなるのか？人

間の愚かさが忌々しかった。

式の鈴をゆする。嫉妬を司る悪鬼はレウイアタンだ。レウイアタンは毒蛇だ。自らが作り出した罪の化身である大蛇に人間が飲み込まれるさまが描かれている。宿主の意思から離れて悪鬼という独立した生命体が誕生した瞬間を描いたものだといわれている。大蛇は生みの親である人間に牙を向けたのである。破裂した臓器の内側よりむっくりと頭をもたげたのが大蛇レウイアタンだ。七鈴は蛇が獲物を捕らえる瞬間を想像した。その瞳には坂崎の背中が映っている。背後から急転直下で急所に向って毒刃を突き立てる。一撃の下に坂崎は倒れ、口から泡を吐き出し昏倒するだろう。意識の遠退く坂崎の体は大蛇の尾が絡みつきとぐるを巻く。赤い舌は喚起に打ち震えている。力を込めれば人間の体などすぐにミンチに出来る。

さあ時が迫ってきた。砂浜を歩く坂崎の足取りに、まだ変化は感じられない。まだ鈴の音さえ聞こえてはいないはずだ。だが、呪われし悪鬼が宿る限り、人間はこの鈴の音からは逃げられない宿命にある。

七鈴は自分が神か、あるいは審判を下す判事にでもなった気分だった。いままさに、一人の人間の命がこの手の中にある。それを握り潰すのは何と容易いことだろうか。

「死刑を執行する」

七鈴は心の中で叫び、高ぶる神経を静め参の鈴を準備する。そろそろ坂崎は自分の身体の異変に気が付き始めるだろう。しかし、もうどうすることもできはしないのだ。間も無く迎えるであろう、自らの死、をとめる手立ては無い。

緒方が小さく吼えた。その口臭は餓えた獣の血の匂いだ。

死人にとってこの瞬間、生人を殺す、この瞬間は何物にも変えがたい。喜びに身体が震えるほどだ。緒方は声を抑えて唸るようにした。人を殺める。それに無償の喜びを感じるのは死人の本能がそうさせるのだろうか。もっと殺したい。もっと多くの血を。

参の鈴に手をかける。足元がおぼつかず坂崎の身体が右左に揺れる。

ドクン、ドクン

心臓が最後の抵抗を試みて早鐘を打っているはずだ。止まることのない心臓というエンジンがギリギリの戦いを繰り広げている。ぬめった血液がエンジンルームから吐き出され全身を駆け巡り帰還する。その循環するパイプに石ころが詰まるようにに支障が生じる。体中の臓器が異変に警報を発し、死に悶える魚のようにパクパクと口を開閉させ酸素を取り入れようとする。が、足りないのは酸素ではないのだ。心の臓が冷や水を浴びて縮こまり、みぞおちが持ち上がるような心苦しい苦痛。死への苦痛。足りないのは。

「さあ、早く」

緒方の瞳に異常なほどの熱がこもり七鈴を急かした。その身体は喜びに震えている。

眼を覚ました湯子は隣で寝ているはずの主人がいない事に気が付いていた。敷かれた布団に横たわった形跡が無い。ちくりと引つかかるような胸騒ぎを覚え起き上がった。障子を開けるがやはり隣室にも姿は無かった。カーテンを引くとまだ弱い夜明けの時だった。闇の粒子の中に僅かな朝日の光りが溶け込み少しずつ力を増幅し今日という日を迎える。東の空がほんのりと明るい。

「散歩にでも出かけたのか」

不安を鎮めるために主人のいない理由は考える。しかし、坂崎に散歩の趣味が無いことは自分が良く知っていた。病気を宣告され精神的に穏やかではないことは分かる。夜明けに散歩に出かける気持ちは理解できなくも無い。しかし。

どこからとも無く忍び寄る暗い影が胸元を締め付ける。

布団を使用した形跡が無いことが不安に拍車をかける。就寝前に「少しやることがあるから」そういつて先に休むことを進められた。

そのまま額面どつりに受け取って眠ってしまった自分に腹が立つ。やることは？

湯子は自分の心の中へ忍び寄る不吉な影を払拭できなかった。やる事とはもしかして。

湯子は激しく頭を振った。忌々しい想像は現実の象と結びつこうと消えうる感じが無い。

もしかして自殺か。

言葉を結んでしまつて後悔の念にとらわれた。全身に鳥肌が立った。ばかばかしいと思いつつも身体が動き始めた。

テーブルの上に在った急須の載つたお盆を持ち上げその下を確認する。館内案内を背表紙を持ち振ってみる。落ちてきたのは絵葉書が二枚だ。次に旅行鞆の中身を全てだしポケットの中に手を通り込んでみた。飴の包みが丸まって底からでてきた。引き出しという引き出しを全て開けてみた。すべては日常のままだ。そこから異常を察知するようなものは無い。

気のせいだ。

自殺なんて。

自殺するならどこかに遺書があるはずだった。湯子は一人、中身を引き出した旅行鞆を眺めた。

私の選んだ人が自殺なんて結論を出すわけが無い。

身体の底から笑いがこみ上げてきた。声を殺して笑った。どういう訳か涙が止まらなかった。

笑いながら泣いてひっくり返した衣類を鞆に詰めなおした。全て夢だったらいい。癌なんて無くなつてくれればいい。そう願った。坂崎にはいえなかった。国立がんセンターの担当医の言葉を。

「抗がん剤で治る癌ではない。」

坂崎が死ぬ。それが強烈な現実となつて湯子に襲い掛かってきた。坂崎が死んだらどうなってしまうのだろう。

悲しくて悲しくて気が狂うくらいに悲しむのだろう。父が死んだとき、あまりの悲しさにもう二度と私は本気で笑うことができない、

そう思った。しかし、実の生活の中で父を思い出すことは年々少なくなつたし、心底おかしくて、笑い転げることもあつた。それが現実だつた。坂崎をこの世に繋ぎ止めているのは消え入る寸前の蝋燭か？それとも地獄に掛けた綱渡りか。踏み外したらそれで終わりだ。

もう一度眼下を見下ろした。茫洋と広がつた浜名湖は藍色のなかに光りの粒子が飛び跳ね、小魚の鱗のように所々で輝いている。

つと、砂浜を歩く男性に眼が留まつた。悠々と散策を楽しむかのように海岸沿いを歩いている。何かを拾い上げるように腰を曲げ立ち止まる。指先でつまんで光りにすかす仕草をする。そしてまた歩き始めた。

湯子は緊張した糸が緩むように溜息を漏らした。と、同時に「何で黙つて出かけるのよ」といった小言が持ち上がった。海岸を歩く男性は坂崎健一に間違いなかつた。

「あなた」

窓ガラス越しに百メートル以上は離れている。精一杯の愛情を込めて呼びかけてみる。その声が坂崎に届くはずは無い。

現実は何が起こるか分からない。交通事故は無数に起こっているし、今この瞬間にも病で亡くなる人がいるだろう。本当に自殺してしまふ人もいる。

「あなた」

強くしかるように呼んでみる。声がとどかなくなつて関係ない。

まさかそんなことは無いだろう。私だけは大丈夫。それは、ずいぶんと図太い幻想だつた。

「あなた」

中高生がするように甘えた声で。

私も死ぬ。主人も死ぬ。それは、至極真つ当なことで、畑に並んだ無数の大根を間引くように、ぬくぬくとした台地から引き抜かれ、殺される。その呼吸が最後ですよ。そんな突然さをもって。

「あなた」

妖艶に挑発する。

次の瞬間には在ると信じていたものが無くなり、永遠に続くと思っていたものは砂丘の楼閣だと思ひ知らされる。

「あなた、あなた、あなた、あなた、あなた」

枯れることの無い泉のように思ひ出が溢れてはシャボン玉のようにふわりと浮かんだ。嫌な思ひ出があつたはずだ。嫌なことばかりだつたはずだ。

どの坂崎も笑っている。もっと喧嘩したはずなのにどれも楽しい思ひ出に他ならない。

「あなたが浮気してたの知ってるのよ。気が付かない振りしてあげたのよ」

坂崎に向つてつぶやく。

「絶対に許さない」

死んでしまえば許すも許さないも無かつた。

「早く帰ってきて」

窓ガラスに映る坂崎を指ではじいた。

私達には未来があつたはずだつた。

ぐらり

坂崎の身体が揺れた。ふらりと右に揺れたかと思うと、振り子が元に戻るように左側によるめき手を突いた。

何が起つたのか湯子には理解できなかった。坂崎の身体は湯子の視界の中で杖を無くした様にぐらりと傾き右に数歩、左に数歩、とよろめきかがみこむように砂浜に手を着いたのだ。

言葉が出なかつた。視界から入つた情報が理解する過程で漏電を起こして破絶した。窓ガラスにしがみ付き目玉を開いた。胸元に手をやりかきむしっている。苦しそうだ。

緊急を要する自体だ。甘い感傷は頭の中から消え去り、その代わ

りに赤い信号が灯った頭の中がサイレンで満たされた。蒸気が爆発したように頭の中が熱い。

何かをしなくてはいけなかった。何をどうしていいのか分からなかった。

目玉だけは坂崎を注視し続け窓際から離れることができない。坂崎は完全に四つん這いになっている。

見ているだけではどうしようもないことは分かっていた。しかし、そこから離れることができなかった。

僅かにでも、視線を外したらそのまま坂崎は消えていなくなってしまう。そんな恐怖があった。

後ろ髪が魅かれる思いで携帯電話を取りに行くことができたのは太郎の泣き声が聞こえたからだだった。

パツと意識が変わり現実が皮膚に突き刺さるように襲ってきた。

枕元においてあった携帯を引っつかむ。太郎と奈美を僅かに視線に捕らえる。寝起きの怠惰を貪る小さな生命体。

窓越しに百メートル近く離れていても坂崎の息苦しさ、苦悶にゆがむ表情までもがありありと脳裏に焼きついた。

119番に連絡する。僅かな間をもって、係りの声が聞こえた。

「火事ですか、救急ですか？」

それはやけに落ち着いた現実的な声だった。

「あの、主人が」

「落ち着いてください。火事ですか？それとも救急ですか？」

手を着き丸まった坂崎が心なしか小さくなったように見える。

「主人が、主人が」

自分では落ち着いていると思っていた。しかし言葉が出てこない。頭の中が働いていないのだ。

「火事ですか、救急ですか？」

それが、100万回も繰り返された言葉のように棘となって響いた。

「主人が倒れたの」

半ば叫ぶように受話器に向かって吼えた。

霧が掛かった様で薄く手ごたえの無い頭の仲で自分の言葉がぐるりぐるりと円をかいた。

そうだ。主人が倒れているのだ。

視界の情報と頭の中が一致すると急に頭の中冷えていくように冷静になった。

旅館名を係りに伝える。詳しい状況は湯子にも分からない。ただ、主人が倒れ息を切らしているのだ。

受話器を置く。救急隊員はすぐにでも駆けつけてくるはずだ。

「奈美、太郎、おきて、早く」

湯子は叫んだ。

そして一人玄関に向う。

子供達が起き上がる気配は無い。何をどうしていいのか、何一つとして手につかない感じだった。

靴を脱ぎ捨て襖を開ける。子供達は呑気に夢の中だ。

血の巡りが加速して手が震えた。

「なんでよ」

言葉に意味は無かった。何かが破裂して飛び出しただけだった。

もう一度窓際に走る。もう救急車が来たかもしれない。切実な願いだ。

そして今一度窓際に釘付けになった。何が乗っているのか分からなかった。あるいは坂崎の内側より何かが持ち上がっているのではないかと思えた。

四つ馬になった坂崎の背中には黒々とした何かが丸まって乗っかっていた。それが動かなければ、果たして湯子にそれほどの動揺を引き起こさなかったかもしれない。

ざわつく様に動き持ち上げた頭は黒猫のそれだった。黒猫は辺りをうかがうような仕草をした。そして、坂崎の首元に鼻先をひきつけた。あるいは、臭いをかいただけかもしれない。しかし湯子には、吸血鬼がそうするように首筋に牙をつきたてたように見えてな

らなかった。

父も、義父のときもそうだった。彼らが帰結を果たす前に必ず黒猫が現れていた。黒猫はまさに不幸を運び込む象徴だった。居ても立ってもいられずに走り出した。

玄関ドアを開け放ち階段に向った。二段飛ばしに階段を駆け下りた。何度かつまずき転倒しそうになる。

自分の足がまるで自分のものではなくなったかのように感覚が鈍かった。一階まで何とか駆け下り外に飛び出そうとする。旅館の敷地を抜け一般道に出たところで激しくクラクションを浴びた。

鼻先まで迫った車のボンネット。鼻のつくゴムのこげた臭い。急ブレーキをかけた音は耳に入ってこなかった。湯子は自分が気が付かぬまま尻餅をついていた。車から男性が降りてきて何かを話しかけてくる。

湯子は立ち上がった。引きとめようとする男性を引き払う。走り出した湯子の腕を男性が掴もうとする。

「私には時間が無いの。お願いはなしで。何で分からないの！」
湯子は叫んだ。何を叫んだか自分で理解できなかった。口から飛び出す感情の魂は相手と意思疎通を図る道具ではなくなっていた。獣の遠吠えだった。それ以上男性は追ってはこなかった。

砂浜に駆け下りる。旅館の部屋より見下ろした場所まではあと僅かな距離だ。もう少しで坂崎の居るところにつく。

もう少しだ。そう思うと急に幻を見たのではないかと疑心に取り付かれた。今頃坂崎は、私と入れ替えに部屋に戻り子供達と焼き魚の朝食を始めているかもしれない。足が止まった。

胸をかきむしり苦しむ坂崎の姿と、朝食を摂りながら今日の予定を幸せ一杯に語る坂崎とが交互に頭の中を席卷する。その中心では愚かに裸足のまま砂浜を走る自分の姿があった。激しい眩暈とともに急激に思考能力が低下していく。

どちらが真実なのだ。何が本当なのだ。私は何をしているのだ。

急激な運動で酸素不足に陥った身体が脳の機能障害を引き起こしたのだ。

足を引きずるようにして湯子は彷徨った。

「帰りたい。帰りたい。」

母の身体に幼児が全てを委ねてしまうように湯子はどこかに自分の身体を委ねてしまいたかった。

もう終わりにしたい。それは本能的な防御だった。

遠くから何かの音が聞こえる。最初は「湯子、湯子」と誰かに自分の名前を呼ばれているようだった。億劫でそれには答えられなかった。「お母さん、お母さん」次に聞こえたのは子供達の声だった。それが徐々に大きくなってくる。起きなくては。義務感が身体を起こそうとした。

「湯子、助けてくれ」

その声が聞こえた瞬間に湯子は覚醒した。声の主は主人のものに間違いは無かった。再び砂浜を走り出した。

やがて黒っぽいものが横たわっているのが視界に入った。丸太位のそれは近づくとほどに人体の特徴を模して現実味を増した。やがて、こちらに向けた球状になった部分が頭部であることが分かった。人間が倒れていることに間違いは無い。浴衣を着ている。うつ伏せになっている。浴衣に書かれた旅館名は宿泊しているそれに間違い無い。髪の毛の長さまで確認できるほどに近づくと、それが自分の主人である坂崎健一に間違いなことが分かった。倒れこむように坂崎に抱きつく。

「あなた。あなた。ねえ大丈夫、ねえ、あなたってば」

湯子の叫び声が悲痛に響いた。坂崎は返事をしなかった。

やがて救急隊員が到着した。湯子は坂崎から引き剥がされるように抱きかかえられた。救急隊員は坂崎に対して簡単な検査を行なうと警察の手配をした。

執行完了（後書き）

ここまでお付き合いいただきまして本当にありがとうございます。まさ感謝、感謝です。

さて今回、第九話でやっと、やっと執行が完了しました。あとは、もう一話つかって、執行者七鈴と運搬人緒方の後片付けをして、前半戦を閉めたいと思います。後半戦は坂崎が執行者となり執行を（殺人）をおこないます。よろしければ感想評価を頂けると嬉しいです。

(前編 完)

七鈴は息を吹きかけ鈴を磨いた。光を受けた金属が鈍く輝いている。その球体の中に円形に歪んだ自分の顔が移りこむ。

執行は終わった。ターゲットは第七の鈴を聞いた。第七の鈴は判決を意味する。死神が大鎌を振り下ろす、風を切る音だ。

「なかなか見事な執行だったな」

後ろで車椅子の車輪が回る音がした。七鈴は返事をしなかった。

「近頃では見かけんとんと生きのいい死体だ」

緒方はそういつて笑った。緒方の手には人間を包めるほどの大きさのゴミ袋が握られている。それを持ち上げ口元を絞り紐を回す。

「ほれ、肉体と離れてもこの死体は未だに元気だ。よほど生人にみれんがあるらしい」

縛った紐でゴミ袋を持ち上げると中身が飛び出そうと左右に揺れ四方に膨らんだり尖ったりした。

七鈴の頭の中には坂崎の妻の叫び声が鬱陶しく響いていた。早く眠りに戻りたかった。

「おや、執行者さんは同情する心がお残りか？」

緒方の言葉に七鈴は溜息をついた。

「また、読心術か？いい加減にしてくれ」

七鈴は体中がだるく疲れていた。

「何を同情することがある？任務を果たした自分に誇りを感じてもいいのではないか？」

緒形は暴れるゴミ袋を足蹴にした。

「私は誰にも何にも同情などはしていない。執行の任務が下り執行を遂行した。ただそれだけのことでそれ以下でも以上でもない」

七鈴には坂崎の妻の泣き声が聞こえていた。すでに現世から冥界の入り口まで、つまり半分死人の世界まで移動している。現世の情が届く場所ではない。届くはずが無いのにすすり泣くような女の声

が耳の中をこだまする。亡霊のように立ちすくむ小さな影は坂崎の幼子達か。

「何をそんなに気に病んでおるのだ？」

緒形はにやけた顔つきで絡んでくる。緒形の読心術が忌々しかった。「また、眠りに戻る。執行は無事に終わった。それだけだ。」

七鈴の頭の中で幼子の泣き声が響いた。どこかで聞き覚えのある泣き声だ。

私は執行者だ。その前は生人だった。死人、転生、生人、死人何度も繰り返してきた。その過程で私は何かを掴み、何かを失らせ、何かを実現させてきたはずだった。今私は何も持つてはいない。両手から溢れるほどに絆を持つ生人がうらやましいのか。

「執行者であることが御不満か？」

「不満なんて在るはずが無い」

「ただ・・・」

「ただなんだね？」

七鈴は緒形の顔を見た。濃いシミが浮かび、深い皺が年輪を重ねた年寄りの威厳と加齢臭を伴った汚さを感じさせた。しかしそこに居るのは緒形であつて緒形ではないのだ。任務を負った死人には、完全なる知恵と、完全なる容姿、完全なる情報が約束される。七鈴は磨き上げた鈴の中に移る自分の顔を覗いた。

『お前は誰だ』

そこに映る美しい女性を七鈴は知らなかった。次の執行では男かもしれないし、老婆かもしれない。

本当の自分の姿。本当の名前。本当の自分。

「私も、本当の自分の姿なんてとうの昔に忘れてしまったよ。しかし、良く考えてみたまえ。本当の自分。生人であつたときの自分の姿にどんな意味があるというのだ？そのときの姿が本当の自分なんてどうして言えるのだ？むしろ、今の自分こそが本来あるべき姿だとなぜ分からぬのだ。」

生人としての記憶が僅かにでも残っているのならそんなものは早

くに捨ててしまふのがいい。それがお前のためだ」

一人だったら良かった。七鈴は緒形を呪った。一人だったらこんなことにはならなかった。一人ならば何に疑問を感じようが言葉にすることは無い。自分をごまかすのは容易かった。言葉にしてしまった今日は疑問の中から疑問次々とが浮かび上がってくる。そしてその全ての疑問が形がなく漠然としている。隠しておいたものに日があたる。見ないようにしていたものを目の前に突きつけられる。

「形在る物がいつか崩れるように、隠したものが暴かれぬことは無い。隠す必要は無いのだ。全てを受け止めよ。お前が悩んだところで何も解決はしない。意味が無いのだ。もつと大きな流れの中で全ては決定され我々は駒の一つでしかないのだから」

七鈴は顔を上げた。そして緒形を睨んだ。

「では、一つだけ教えてくれ。我々が執行することに、人を殺すことにどんな意味があるのだ？」

「意味など無い」

緒形ははつきりといった。

「我々は存在する意味も無い。濁流に流される落葉や、地中深くに埋まる石ころと同じで誰の役に立つことも無い。何の存在意味も無い。存在意味の無い我々の行動に意味などあるう筈が無い。誰が死のうが、誰が生きようがやはり何の意味も無いのだ。そんなことも分からなかったか。執行者よ」

七鈴は頭の中がぐるぐると回り何かが溶けて流れ出すようだった。

「我々に存在意味は無いのか？」

七鈴の問いに緒形は大きく頷いて見せた。ゴミ袋に入った死体はもう動かなかった。耳の中から脳みそがとろけだし溢れてきた。手に持ったさすが足元に転がった。その鈴を坂崎の子供達を取り合って騒ぎ出す。溢れる脳みそは止まることなく七鈴を中心に水たまりを作った。ゴロリと目玉が転がった。私は壊れていく。転がった目玉が自分の姿を見上げる。

「あなたは誰？」

子供達の笑い声、坂崎の妻の泣き声、あるいは自分の叫び声ごとく
るを巻いて苦しめてくる。

「お前に存在意味は無い」

長年の疑問の答えがあった。何のために人を殺めてきたのか。何の
理由も無かったのだ。

緒形を見つめた。最初から分かっていたことだった。

「運び屋緒形。お前を執行する」

七鈴は鈴を握り締めた。

(前編 完) (後書き)

最終までお付き合いいただきありがとうございます。つたない文章では在りましたが、少しでも楽しんでいただけたようでしたら幸いです。

さて懲りもせず後編も検討しております。後編の連載もぜひ、かわいがってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9150g/>

執行者

2010年10月10日01時41分発行